

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（13）

市内遺跡詳細分布調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

**武部製鉄所跡**

**奥ノ仁田遺跡**

**赤尾木城址**

**太田 遺 跡**

2004年3月

鹿児島県西之表市教育委員会

## 序 文

種子島は、黒潮海流の中に位置し、低平な大地と数多くの小川があり、照葉樹林が繁茂し、その古くから自然の恵みを受け豊かな環境のもとにあることから、島の各所から遺跡が数多く発見されています。

この市内遺跡詳細分布調査は、平成13年度から15年度にかけて、国と県の補助を受けて行った学術発掘をまとめたものであり、以前から西之表市で周知の遺跡として、その調査の必要性が問われていたところであります。

内容は、平成13年度に西之表市東南部の立山奥ノ仁田遺跡、現和の武部製鉄所跡遺跡、平成14年度に国上太田遺跡、種子島家の居城のあった赤尾木城址を発掘し、平成15年度にその結果をまとめたものであります。

短い期間の中で、それぞれの遺跡の広がり、遺構などを確認するための発掘であったため、十分な成果を得ることができなかった面もありますが、ある程度の遺跡の位置付けをすることができたものと思います。

本報告書が学術的文献として活用されるのはもとより、市民の文化財保護意識高揚の一助となることを念じる次第であります。

最後に、本報告書を刊行するにあたり、全面的にご協力をいただきました鹿児島県教育庁文化財課及び同県立埋蔵文化財センターをはじめ、立山地区、国上地区、現和地区の関係者、さらに貴重なご助言をいただいた諸先生方に対して厚くお礼を申し上げます。

平成16年3月

西之表市教育委員会教育長 有島 正之

# 報告書抄録

ふりがな	ぶぶせいてつしょあと・おくのにたいせき・あかおぎじょうし・おおたいせき							
書名	武部製鉄所跡・奥ノ仁田遺跡・赤尾木城址・太田遺跡							
副書名	市内遺跡詳細分布調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	13							
編集者名	沖田純一郎							
編集機関	西之表市教育委員会							
所在地	〒891-3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地							
発行年月日	2004年3月26日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
武部製鉄所跡	西之表市現和	462136	24	30度41分14秒	131度02分41秒	20011205~20011226	200m <sup>2</sup>	詳細分布
奥ノ仁田遺跡	西之表市立山	462136	66	30度36分55秒	131度02分30秒	20020117~20020130	105m <sup>2</sup>	詳細分布
赤尾木城址	西之表市西之表	462136	25	30度43分48秒	131度00分10秒	20020819~20020823	39m <sup>2</sup>	詳細分布
太田遺跡	西之表市国上	462136	94	30度47分49秒	131度03分17秒	20021016~20021031	73m <sup>2</sup>	詳細分布
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
武部製鉄所跡	生産遺跡	近世・近代	製鉄・製鍊関連施設	鉄滓・羽口・鉄製品				
奥ノ仁田遺跡	散布地	縄文時代早期		土器片 石器類		平成4年 発掘調査 (出土品は県文化財に指定)		
赤尾木城址	城館跡			出土遺物なし				
太田遺跡	散布地	古墳 8~10世紀 12~13~16世紀		土器片・石斧・須恵器・土師器・陶磁器類ほか				

## 例　言

1. 本書は、国・県の補助を受け実施した市内遺跡詳細分布調査事業に伴う、武部製鉄所跡・奥ノ仁田遺跡・赤尾木城址・太田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、西之表市教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 本書に用いたレベル数値は、中村コンサルタントが作成した地形図に基づく海拔高である。
4. 本書の遺物番号は遺跡ごとに通し番号を付け、各遺跡の本文及び挿図・図版番号と一致する。
5. 発掘調査における測量・実測・写真撮影は主に沖田が行い、中村桂子・荒井美佳子・安藤美津子・下園恵・桑原とも子が測量・実測の補助を行った。
6. 本書の執筆と編集は沖田が行い、実測および浮世絵は沖田・中村桂子・荒井美佳子・安藤美津子・桑原とも子が行つた。
7. 写真図版の遺物撮影は沖田、種子島開発総合センター委託職員尾形之善氏が行つた。
8. 発掘調査及び整理作業に関して、鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。
9. 出土遺物は西之表市教育委員会で保管し、展示・活用する。

# 目 次

## 序文

報告書抄録

例言

## 武部製鉄所跡

第Ⅰ章 調査の経過			
第1節 調査に至る経緯	2	第1節 調査の方法	7
第2節 調査の組織	2	第2節 層位	7
第3節 調査の経緯	3	第3節 遺構	8
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境		第4節 遺物	10
第1節 遺跡の位置	4	第Ⅳ章 調査のまとめ	
第2節 遺跡の環境	4	第1節 遺跡の範囲	11
第Ⅲ章 調査の概要		第2節 調査のまとめ	11
		付編 武部製鉄所跡から出土した鉄滓の分析	13

## 奥ノ仁田遺跡

第Ⅰ章 調査の経過			
第1節 調査に至る経緯	26	第1節 調査方法	31
第2節 調査の組織	26	第2節 層位	31
第3節 調査の経緯	26	第3節 各トレンチの調査	31
第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境		第4節 遺構	34
第1節 遺跡の位置	28	第5節 遺物	34
第2節 遺跡の環境	28	第Ⅳ章 調査のまとめ	
第Ⅲ章 調査の概要		第1節 遺跡の範囲	43
		第2節 調査のまとめ	43

## 赤尾木城址

第Ⅰ章 調査の経過		第Ⅲ章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯	53	第1節 調査方法	61
第2節 調査の組織	53	第2節 層位	61
第3節 調査の経過	53	第3節 トレンチ調査状況	61
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境		第4節 遺構・遺物	61
第1節 遺跡の位置	55	第Ⅳ章 調査のまとめ	
第2節 赤尾木城址の経緯について	55	第1節 遺跡の範囲等	64
		第2節 調査のまとめ	64

太田遺跡		77
第Ⅰ章 調査の経過		
第1節 調査に至る経緯	73	
第2節 調査の組織	73	
第3節 調査の経過	73	
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境		
第1節 遺跡の位置と環境	75	
第Ⅲ章 調査の概要		
第1節 調査方法	77	
第2節 層位		77
第3節 トレンチ調査状況		77
第4節 遺構		81
第5節 遺物		81
第Ⅳ章 調査のまとめ		
第1節 遺跡の範囲等		92
第2節 調査のまとめ		92
付編 太田遺跡から出土した炭化材の年代		94

## 挿図目次

### 武部製鉄所跡

第1図 武部製鉄所跡位置図	1	第4図 遺構配置図	9
第2図 武部製鉄所跡と周辺遺跡図	5	第5図 遺物実測図	10
第3図 トレンチ等配置図	9	第6図 武部製鉄所跡範囲	12

### 奥ノ仁田遺跡

第1図 奥ノ仁田遺跡位置図	25	第6図 出土遺物（2）	37
第2図 奥ノ仁田遺跡と周辺遺跡図	29	第7図 平成12年度出土遺物（1）	39
第3図 トレンチ配置図	32	第8図 平成12年度出土遺物（2）	40
第4図 トレンチ遺物出土状況	35	第9図 平成12年度調査遺物出土状況	42
第5図 出土遺物（1）	36	第10図 調査地・遺跡範囲	44

### 赤尾木城址

第1図 赤尾木城址位置図	52	第4図 土層断面図	63
第2図 赤尾木城址と周辺遺跡	58	第5図 遺構等残存予測地	65
第3図 トレンチ配置図	62		

### 太田遺跡

第1図 太田遺跡位置図	72	第8図 出土遺物（1）	86
第2図 太田遺跡と周辺遺跡図	76	第9図 出土遺物（2）	87
第3図 トレンチ配置図	78	第10図 出土遺物（3）	88
第4図 土層断面図（1）	79	第11図 出土遺物（4）	89
第5図 土層断面図（2）	80	第12図 出土遺物（5）	90
第6図 遺物出土状況（1）	84	第13図 出土遺物（6）	91
第7図 遺物出土状況（2）	85	第14図 遺跡の範囲	93

## 表目次

### 武部製鉄所跡

第1表 周辺遺跡地名表	6	第3表 遺構一覧表	8
第2表 トレンチ調査状況	7	第4表 鉄滓重量一覧	10
奥ノ仁田遺跡			
第1表 周辺遺跡地名表	30	第4表 石器観察表	38
第2表 トレンチ調査状況	34	第5表 土器観察表	41
第3表 土器観察表	38		
赤尾木城址			
第1表 周辺遺跡地名表	59	第2表 トレンチ調査状況	61
太田遺跡			
第1表 周辺遺跡地名表	75	第4表 須恵器・土師器・陶磁器計測表(1)	82
第2表 トレンチ調査状況	77	第5表 須恵器・土師器・陶磁器計測表(2)	83
第3表 主な出土物一覧	82		

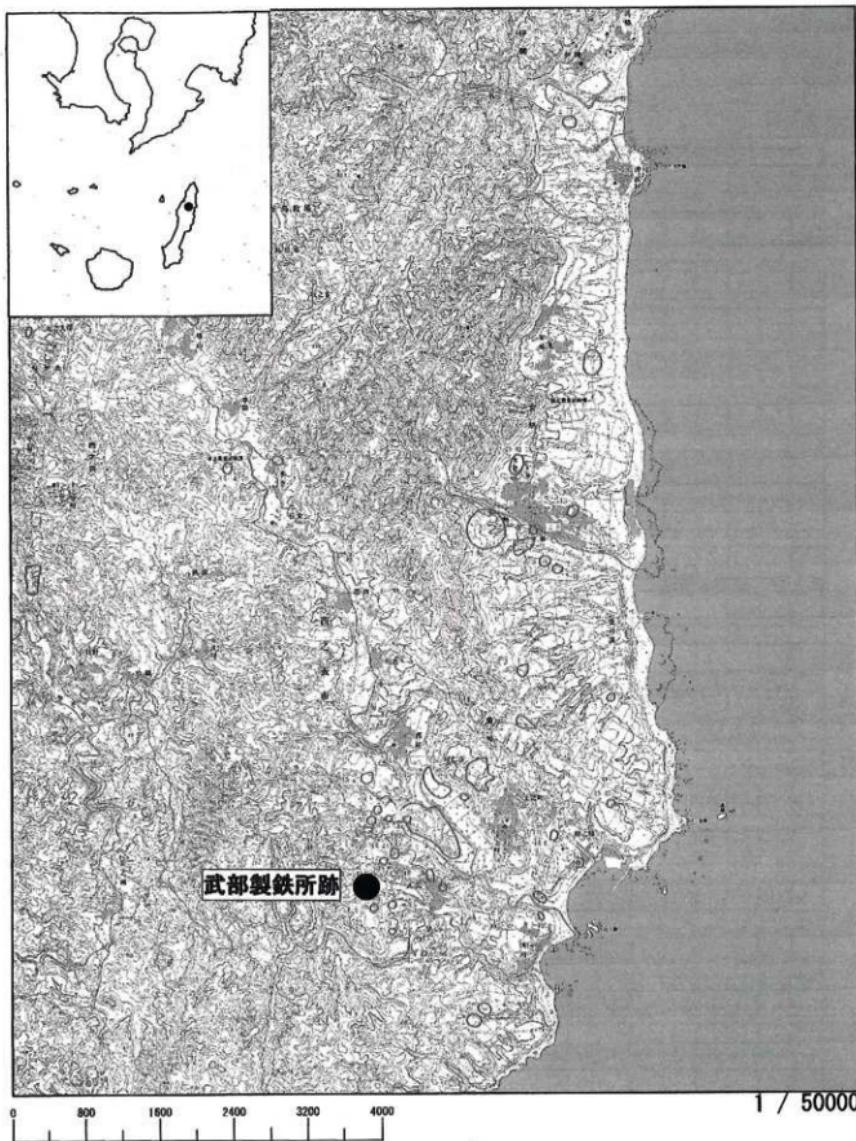
## 写真図版

### 武部製鉄所跡

図版1 調査状況(1)	17	図版5 4トレンチ出土遺物	21
図版2 調査状況(2)	18	図版6 4トレンチ・1号遺構内出土遺物	22
図版3 調査状況(3)	19	図版7 遺構内出土遺物(1)	23
図版4 2トレンチ出土遺物	20	図版8 遺構内出土遺物(2)	24
奥ノ仁田遺跡			
図版1 調査状況(1)	45	図版5 出土遺物(2)	49
図版2 調査状況(2)	46	図版6 出土遺物(3)	50
図版3 調査状況(3)	47	図版7 出土遺物(4)	51
図版4 出土遺物(1)	48		
赤尾木城址			
図版1 調査地現況	66	図版4 調査状況(2)	69
図版2 調査地現況	67	図版5 調査状況(3)	70
図版3 調査状況(1)	68	図版6 調査状況(4)	71
太田遺跡			
図版1 調査状況(1)…96	図版5 出土遺物(1)…100	図版9 出土遺物(5)…104	
図版2 調査状況(2)…97	図版6 出土遺物(2)…101	図版10 出土遺物(6)…105	
図版3 調査状況(3)…98	図版7 出土遺物(3)…102	図版11 出土遺物(7)…106	
図版4 調査状況(4)…99	図版8 出土遺物(4)…103		

# **武部製鉄所跡**





第1図 武部製鉄所跡位置図

## 第Ⅰ章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

1543年種子島に鉄砲が伝来し、たちまち国産化が図られたことは、その技術もさることながら種子島で製鉄が行われてきた証でもある。しかしながら、文献史上に見える種子島の製鉄は、種子島家譜によると正徳3年(1713年)が初見である。現和武部に島主種子島久基が製鉄所を作り、明治時代まで操業を行ったものである。島内各地で鉄滓が採集されているのにもかかわらず、文献史料は現在のところ極めて少なく、わずかに製鉄に関する伝承が残っているのみである。

西之表市教育委員会では、種子島の製鉄の歴史を解明する手段のひとつとして平成10年度よりオイル缶で製作した簡易溶鉱炉で、砂鉄と木炭から鉄を作る実験を行い、さらに市内で鉄滓が採集される地域の踏査を行ってきた。

平成13年度は国・県の補助を受け、不明な点が多い種子島の製鉄史の情報を得るために、西之表市の文化財に指定されている武部製鉄所跡の詳細分布調査を行うことになった。

詳細分布調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成13年12月に10日間行った。調査後の整理・報告書作成作業は平成15年度に行った。

### 第2節 調査の組織

#### (発掘調査)

発掘調査主体者 西之表市教育委員会

発掘調査責任者 西之表市教育委員会 教育長 有島 正之

発掘調査企画担当 西之表市教育委員会 文化課課長 浦口 安雄  
課長補佐 奥村 学

発掘調査担当 西之表市教育委員会 文化課主事 沖田純一郎

整理作業指導 大同工業大学 名誉教授 横井 時秀

発掘調査作業員 上妻英勝・西川スエ・西川スエ子・中村桂子・江口幸路・安藤美津子  
荒井美佳子

発掘調査協力者 上妻英勝

#### (整理作業)

発掘調査主体者 西之表市教育委員会

発掘調査責任者 西之表市教育委員会 教育長 有島 正之

発掘調査企画担当 西之表市教育委員会 社会教育課課長 阿世知猛雄  
" 総括課長補佐 奥村 学

整理作業担当 西之表市教育委員会 社会教育課主事 沖田純一郎

整理作業員 安藤美津子

### 第3節 調査の経緯

調査は平成13年12月5日から12月26日まで行った。調査対象地内の畑地内にグリッド及びトレンチを設置し、掘り下げは表土を重機で除去した後、人力で行った。トレントの大きさは遺物の出土状況、土層確認のため適宜変更するなどした。

以下、調査の経過については日誌抄をもってかえる。

12月5日（水）	調査地グリッド杭設置。掘り下げ開始。アカホヤ火山灰層上面より鉄滓出土する。アカホヤ火山灰層下位は基盤層（岩盤）確認。 遺構検出作業。
6日（木）	畑地入り口（南側）より多量の礫を検出。 粉炭まじりのプラン検出。 奥村文化課長補佐・西之表市文化財保護審議委員5名来跡。
7日（金）	礫集中出土地点、検出作業。 東側部分掘り下げ。
10日（月）	北側、旧水田地に1・2トレント設置掘り下げ。 表層より鉄滓出土。雨天のため作業、午前で終了。
11日（火）	北側、旧水田跡に3・4トレント設置掘り下げ。 南側畑地掘り下げ。溝状遺構を検出。 鹿児島県立埋蔵文化財センター中原一成氏、奥村文化課長補佐来跡。
13日（木）	3トレント掘り下げ。 南側畑地内掘り下げ、遺構検出作業。
14日（金）	南側畑地内掘り下げ。 雨天のため作業、午前で終了。
17日（月）	北側、4トレント掘り下げ、焼土を確認。
19日（水）	4トレント掘り下げ。 南側畑地内、礫集中出土地検出作業。
20日（木）	南側畑地内、遺構検出作業。 4トレント掘り下げ。各遺構写真撮影。 浦口文化課長、種子島開発総合センター委託職員宮浦五雄氏来跡。
25日（火）	トレント配置図、遺構配置図作成。遺構清掃、写真撮影。
26日（水）	調査地清掃、写真撮影。各遺構人力にて砂をかぶせ埋め戻す。 道具後片付け。調査地重機にて埋め戻し作業。調査終了。 奥村文化課長補佐来跡。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

武部製鉄所跡は大隅半島の最南端である佐多岬の東南海上約54kmに位置する種子島西之表市に所在する。種子島から薩南諸島・さらに奄美・沖縄諸島と蜿蜒1,200kmの海の飛び石が続き、これらの島々には南から北へと黒潮が走っている。

種子島は南北52km、東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高が約282mしかない低平な島で、隣に位置する屋久島とは対照的である。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町の1市2町からなる。武部製鉄所跡は西之表市の東側、現和武部にあり、昭和50年西之表市の文化財（史跡）に指定されている。

これまでの発掘調査により種子島は貴重な遺跡が多数発見され、関係者から注目を浴びる島となってきた。旧石器時代では約3万年前の礫群が検出された横峯遺跡（南種子町）・石器、礫群等の生活遺構が検出された立切遺跡（中種子町）などがある。縄文時代になると草創期では本土以外で初めて隆蒂文土器が出土しその遺物の量・質で全国的に有名になった奥ノ仁田遺跡、多数の生活遺構や多量の隆蒂文土器が出土した三角山遺跡（中種子町）・鬼ヶ野遺跡（西之表市）などがある。

早期では多数の報告例があり、これまで早期前葉とされる前平式の出土例はなかったが、最近の発掘調査ではこの前平式の出土があり、本土と同じ土器文化の変遷になることが明らかとなってきたが、量的には前平式に統く吉田式段階以降のものが大多数を占める。他、下剥峯式・桑ノ丸式・押形文土器・手向山式・苦浜式・塞ノ神式・平柄式等が報告されている。

前期では轟式・曾畠式の出土が報告されている。中期の様相は不明な点が多く、遺跡の数も現時点では皆無に等しい。後期では指宿式・一漢式・市来式・納曾式・磨消繩文・綾式などの報告例がある。晚期では黒川式の報告例がある。

弥生時代・古墳時代の著名な遺跡としては多くの貝製品と多数の人骨が出土した広田遺跡（南種子町）や覆石墓が多数検出された鳥之峯遺跡（中種子町）などがある。これらはいずれも砂丘に立地する埋葬遺跡であり、田ノ脇遺跡・椎ノ木遺跡・小浜遺跡・上浅川遺跡（いずれも西之表市）等も砂丘に位置する埋葬遺跡である。埋葬遺跡の他ではこれまで種子島・屋久島のみに出土している極めて地域性の強い土器とされる上能野式土器が出土した、上能野貝塚・嶽ノ中野遺跡・太田遺跡などがある。古墳時代以降については発掘調査例や表面採集資料も少ないため未解明な点が多いのが現状である。製鉄関連では西之表市では太田遺跡、古田製鉄所跡等で鉄滓が採集され、鉄浜（西之表市安城）、すぐ山（西之表市）など製鉄に関連する地名等がある。

### 第2節 遺跡の環境

武部製鉄所は西之表市の現和武部に所在し湊川・浅川川に挟まれた低地部分に位置している。製鉄所跡を取り囲むように小川が流れしており、この水流を使って水車による製鉄を行ったとも言われている。周辺には縄文時代以降の遺跡も多く、また種子島では数少ない古代から中世・歴史時代の遺跡・伝承が残る地域である。



第2図 武部製鉄所跡と周辺遺跡図

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	横峯	西之表市現和上之町	弥生	県埋文報(5) S51年確認調査
2	指辺	西之表市現和庄司浦	縄文前期	県埋文報(5) S50年確認調査
3	中之峯	西之表市現和上之町	縄文	県埋文報(5) S50・51年確認調査
4	院房	西之表市現和武部	中世	
5	森田	西之表市現和上之町	縄文・古代	平成14年試掘調査
6	西俣	西之表市現和西俣	縄文(草・早) 弥生	県埋文報(4) S54年発掘調査
7	屋仁吾	西之表市現和西俣	縄文	平成7年農政分布調査
8	下佐野和	西之表市現和武部		S63年確認調査
9	南佐野和	西之表市現和武部		S63年確認調査
10	堤	西之表市現和武部		S63年確認調査
11	道月ノ峯	西之表市現和武部	中世	
12	武部	西之表市現和武部	縄文後期	
13	横野平	西之表市現和武部		S63年確認調査
14	武部製鉄所跡	西之表市現和武部	歴史	本報告書
15	柿之木	西之表市現和武部	縄文・古墳・中世	H10年農政分布調査
16	石原平	西之表市現和武部	縄文	H10年農政分布調査
17	池之迫	西之表市現和武部		S63年確認調査
18	山道之平	西之表市現和武部		S63年確認調査
19	下池之迫	西之表市現和武部		S63年確認調査
20	二俣野	西之表市現和武部		S63年確認調査
21	東方ノ平	西之表市現和上之町	弥生	
22	泉原	西之表市現和下之町	縄文・弥生	
23	田ノ脇	西之表市現和田の脇	弥生	市概報(1) · S41年発掘調査
24	内野堂	西之表市現和下之町	古墳	H10年農政分布調査
25	上浅川	西之表市現和浅川	古墳	H9年発掘調査
26	浅川牧I	西之表市現和浅川	縄文(早・後・晚)	県センター埋文報(10)
27	浅川牧II	西之表市現和浅川	縄文(早・前・晚)	S54年発掘調査
28	直助峯	西之表市現和下之町		S63年確認調査

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 調査の方法

調査は平成13年12月5日から平成12年12月26日まで実施した。調査対象地の南側の畑地には2m×2mのグリッドを設置し、詳細に調査を行った。北側にはトレンチを任意の大きさで4箇所設置し、土層確認等のため適宜拡張しながら調査を行った。調査面積は約200m<sup>2</sup>となった。

第2表 トレンチ調査状況

トレンチNo	大きさ (m)	深さ (cm)	遺構	主な遺物
1	1.8×6.0	47	×	鉄滓
2	1.5×5.5	40	×	鉄滓・鉄製品
3	1.0×2.5	27	×	なし
4	3.2×2.5	185	○	鉄滓・羽口・鉄製品・レンガ・礫
南側畑地	2×2グリッド。 遺構を多数検出 したためグリッ ド撤廃	最深部45	○	鉄滓・木炭等

### 第2節 層位

土層は場所によって一部の層が欠落している部分もあるが基本的には下記のとおりである。

I層 表土

II層 黒褐色土

III層 黄橙色火山灰層 アカホヤ火山灰層・約6,400年前の鬼界カルデラ噴出物

IV層 ベージュ色ローム土

V層 暗褐色土

VI層 暗黄色ローム層 粘質が強い、下位に小片の砂岩が散在する

VII層 岩盤

### 第3節 遺構

南側の畠地内と4トレンチ内において製鉄関連と思われる遺構を検出した。南側の畠地内の遺構検出面は全てアカホヤ火山灰層を掘り込んだ形で検出された。

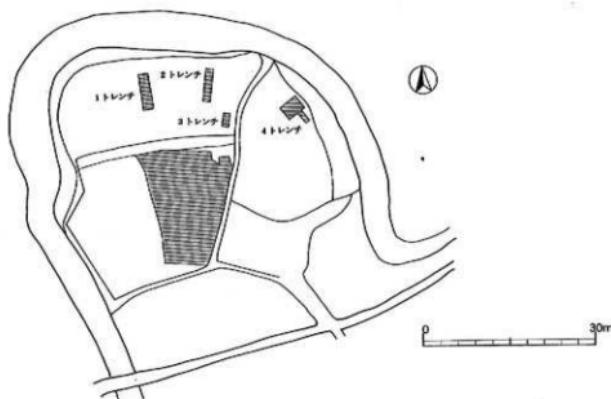
X・Yは比較的鉄滓がまとまって出土した箇所である。X・Yともに鉄滓には流动滓が含まれている。木炭・礫が検出されたものは、1号・2号・3号・5号である。うち、5号は2.8m×2.7mのほぼ円形状になり、拳大から40cmを超える大きめの礫、約300個がぎっしりと詰まっており中には一部木炭が混じる。表面を検出したのみで埋め戻したため、掘り込みや礫の点数等は不明である。4号は他の遺構とは趣が異なり、0.9m×0.8mの円形で上部に粉炭が10cm程度堆積し下部は炎熱を受け赤化した焼土となる。深さは11cm程度である。製錬滓が7点出土した。

A・Bは溝状の遺構である。Aは長さ約5.5m、幅30cm～60cm・Bは長さ1.9m、幅10cm～20cmで埋土は非常に固く厚さはいずれも約1cm～2cmほどである。埋土からは遺物は出土しなかった。これらの溝は製鉄に関連するものと思われるが、その性格は不明である。

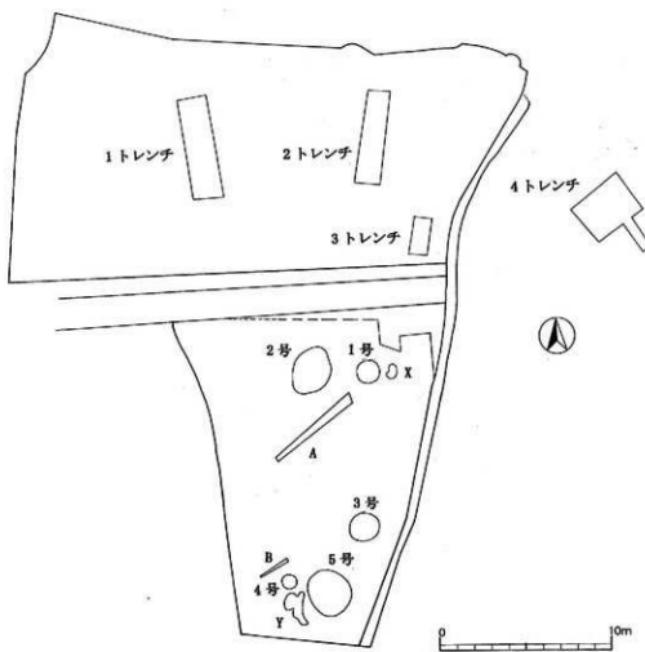
4トレンチからは赤褐色土・木炭層を検出した。赤褐色土は厚さ約60cmその下位に木炭層・礫と続く。レンガ・製鉄滓・羽口・炉壁の一部と思われる粘土・鉄製品(釘)が出土した。全ての遺構は、半裁または4分の1カットで調査を行い完掘は行わず、調査終了後は砂をかぶせ現状に復した。

第3表 遺構一覧表

遺構No	大きさ (m)	深さ (cm)	所 見
1号	1.4×1.4	28	木炭・礫が混在する層が12cmの厚さで堆積する。製鉄滓が出土。
2号	3.0×2.2	14	30cmを超えるものや拳大の礫が100個ほど出土する。礫の一部は炎熱を受けている。土層の断面には木炭の小片が見られる。
3号	1.8×1.6	12	木炭小片が混じる。熱を受けた30cmほどの中7個が出土。
4号	0.9×0.8	11	上部は粉炭が10cm程度堆積し、下部は熱を受け赤化した土が堆積。製錬滓が7点出土。
5号	2.8×2.7	—	拳大から40cmをこえる大きめの礫約300個からなる。礫はぎっしりと詰まっている中には一部木炭が混じる。表面を検出したのみで最終的な礫の点数、深さ、形状等は不明である。
X	0.9×0.5	10	流动滓が出土、金属化しているものもある。
Y	2.0×1.0	10	流动滓が出土、金属化しているものもある。
4トレンチ内	3.2×2.5 (トレンチ)	185	赤褐色土及び木炭層を断面で検出。赤褐色土は厚さ約60cm、その下位に木炭層・礫と続く。レンガ及び製鉄滓・羽口・鉄製品(釘)・炉壁の一部が出土。



第3図 トレンチ等配置図



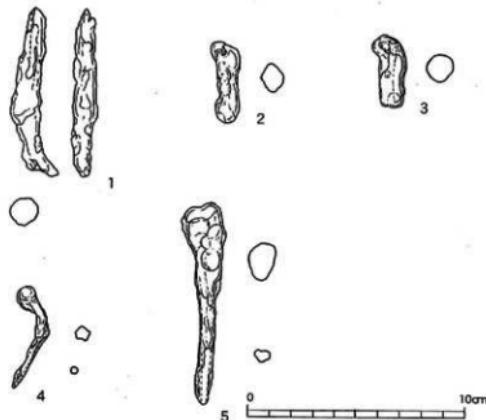
第4図 遺構配置図

#### 第4節 遺物

遺物は表採品も含めてパンケース6箱分出土した。1トレンチでは遺物は出土しなかったが、それ以外の調査地では鉄滓・木炭・炉壁と思われる粘土・レンガ・羽口・鉄製品(釘)・穢等が出土したが、遺物の主体は鉄滓である。2・3トレンチでは表層より鉄滓・鉄製品が出土するのみに留まった。4号からは楕円形の鉄滓が出土した。この楕円形の鉄滓は4号のみで出土し、製錬滓であると判断した。よって、4号は製錬炉の可能性が高いと思われる。他の遺構からは鉄滓が出土し、流动滓も含まれている。今回の調査で図化した遺物は鉄製品5点だけである。1・2・3・4は2トレンチから出土し、5は4トレンチから出土したものである。4・5は釘であり、1・2・3は製品の特定はできなかった。また、出土した鉄滓を磁石により選別し、鉄滓と一部金属化している鉄滓に分類した。第4表はその重量をまとめたものである。

第4表 鉄滓重量一覧

出土地	鉄滓 (kg)	鉄を含む鉄滓 (kg)
2トレンチ	1.5	0.35
4トレンチ	2.85	0.2
1号	2.05	1.95
4号	0.6	0.15
5号	1.8	1.75
X	5.5	0.8
Y	1.05	0.65
計	15.35	5.85



第5図 遺物実測図

## 第Ⅳ章 調査のまとめ

### 第1節 遺跡の範囲

今回の調査の結果、1・2・3トレーナーを設置した畠地には製鉄所址の痕跡は既に滅失していることが判明した。製鉄所の遺構等が残存している範囲は第6図で示している箇所と想定される。

### 第2節 調査のまとめ

武部の製鉄所は記録によると、正徳3年(1713年)琉球から技師を招き水車による製鉄を行ったとあり、水車はフイゴを動かし送風するためのものである。幕末まで操業しその後明治に再興されたが3年間で終わり、燃料の木炭は近くの山より供給され、原料の砂鉄は安城平山、住吉、石寺の浜で採取され運ばれてきたと考えられている。

調査は、製鉄所の有無、製鉄所の範囲、製鉄の開始された時期、規模等を確認することが大きな目的であった。

調査の結果8基の遺構が確認された。1・2・3号は製鉄炉の可能性が高い遺構であると思われる。形状は非常に小型の円形である。X・Yは製鉄もしくは製錬の過程で流れ出た鉄滓が堆積したものと思われる。4号は出土した鉄滓が製錬滓であるため、製錬炉の可能性が高い。

5号は多量の礫が密集して検出された。今回の調査では表面のみを検出したに過ぎないため、その性格は不明であるが、礫内に木炭、鉄滓が見られることから製鉄関連の遺構と思われる。

4トレーナーでは赤褐色土が検出され、焼土と思われる。下位に木炭の小片、礫と続く。一部金属化した鉄滓及び流動滓、レンガ、炉壁の一部と思われる粘土、羽口が出土したため、製鉄炉の可能性が高く、レンガが出土したことから明治時代のものと想定される。

1・2・3号を仮に製鉄炉と捉えると、非常に小型の円形堅形炉であったと思われる。西之表市教育委員会がオイル缶で製作した小型の製鉄炉では、木炭20kg・砂鉄6kgを使い約2kgの鉄塊が得られることが実証されている。武部においては操業当初は数基の小型堅形炉によって製鉄を行いその後4トレーナーで検出されたような大型の炉を構築していくと推定することもできる。4号遺構から、出来た鉄塊の製錬までを当地で行っていたと思われる。

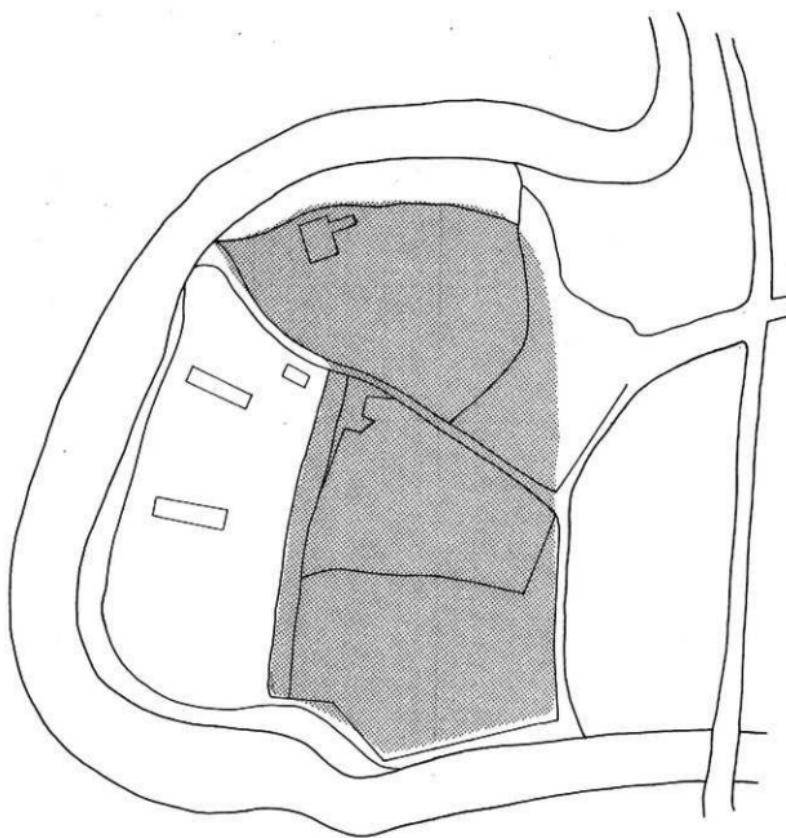
4トレーナーを除いて、遺構内から時代を判断する遺物が出土しなかったため、明確な操業年代を特定するには至らなかった。

鉄は古代から重要な要素であり、当時の政治・経済状況を鮮明に表し、鉄の流通形態を探ることは当時の交易を考える上で必要なことである。

今回の調査によって初めて製鉄に関する遺構が確認されたことは種子島の製鉄史を解明していくための大きな成果であった。

第6図 武部製鉄所跡範囲

30m  
0



## 付編

### 武部製鉄所跡から出土した鉄滓の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

武部製鉄所跡は、種子島東岸の台地上に位置する。武部製鉄所は、1713年（正徳3年）に琉球から技師を招いて製鉄を行ったとの記録が残っている。この製鉄所は幕末まで操業され後明治時代に一度再興されたが、およそ3年で操業停止したとされている。今回の発掘調査により、近世から近代と思われる製鉄関連の遺構などが検出されている。

今回の分析調査では、出土した鉄滓の成分分析等を行い、原材料や鉄生産技術に関する資料を得る。

#### 1. 試料

試料は、4号プラン内から出土した鉄滓1点である。鉄滓は、大きさが100×90×30mm、重量約147g、黒褐色で凹凸の著しい鉄滓である。外面観察、断面観察、鉱物同定を行う。

#### 2. 方法

分析は、株式会社日鐵テクノリサーチの山本広一・伊藤 薫両氏にお願いした。以下に分析方法を記す。

調査資料は、外観的特徴を記録した後、平均的な箇所についてダイヤモンドカッターにて切り出し、以後の分析試料とした。

組織観察用試料は、断面が観察面になるように真空下でエポキシ系樹脂に埋め込み組織を固定後、粗研磨は湿式、仕上げ研磨はダイヤモンドベーストを用いて行った。組織観察は光学顕微鏡によりマクロ・ミクロ組織構造を記録した。また、同研磨試料を用いてX線マイクロアナライザ（略称：EPMA）により鉱物相の同定を行った。なお、使用した装置は以下の通りである。

外観観察：実体顕微鏡 SZ-40型（オリエンパス光学工業製）

マクロ組織観察：投影機 V-II型（日本光学製）

ミクロ組織観察：金属顕微鏡 HFX-II型（日本光学製）

鉱物同定：X線マイクロアナライザー（EPMA） JXA-8100型（日本電子製）

#### 3. 結果・考察

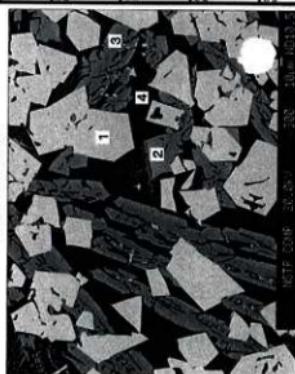
図版1に外観および断面マイクロ・ミクロ組織を、表1・図1に鉱物相の分析結果を示した。写真1-2の断面マイクロ組織に示したように、数mmから数10μmの丸みを帯びた空孔が多く存在し密度の低い鉄滓である。表面が「シワ状」になっていることや、丸みを帯びた空孔が多いことから、この鉄滓の生成過程で活発なガス発生が伴っていたと判断される。図版

表1 鉱物相の分析結果 (単位:重量%)

鉱物相	FeO	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	TiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	鉱物名
1	60.5	0.23	3.81		1.84	33.1			ウルボスピネ
2	61.5	31.4		0.57	4.63	0.82	0.08		ファラライト
3	59.8	31.5		0.47	6.5	0.76			ファラライト
4	20.4	47.3	14	9.44	0.36	3.46	3	0.71	非晶質珪酸塩

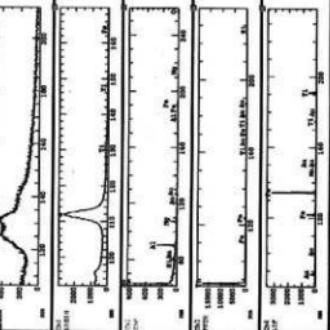
凡例 FeO:酸化第一鉄, SiO<sub>2</sub>:酸化珪素, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>:酸化アルミニウム  
CaO:酸化カルシウム, MgO:酸化マグネシウム, TiO<sub>2</sub>:酸化チタン, K<sub>2</sub>O:酸化カリウム, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:五酸化リン  
鉱物相の番号は、図1の分析箇所番号に対応する。

反転電子顕微鏡像

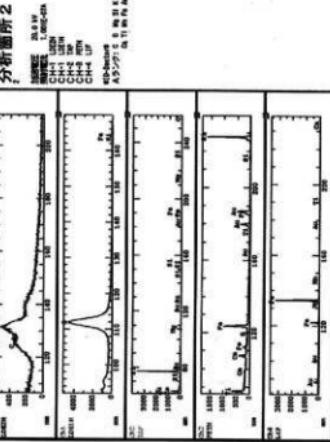


写真中の数字は分析箇所を示す

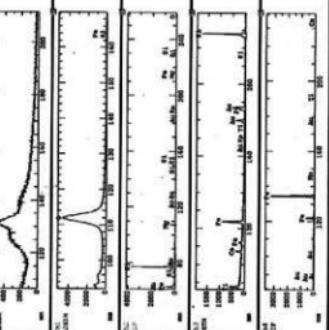
分析箇所 1



分析箇所 2



分析箇所 3



分析箇所 4

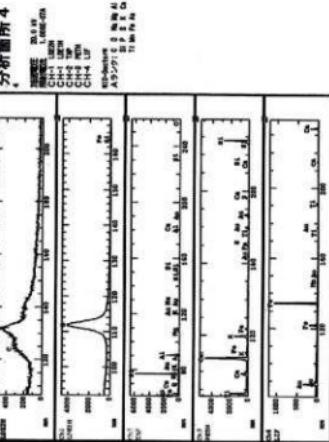


図 1 EPMAによる定性分析結果

1-3～1-6は、図版1-2中のNo1～3に相当する領域の拡大組織を示したものである。図版1-3、4は平均的な組織を示す領域で、構成鉱物は明灰色のチタン化合物（符号：T）で、EPMA分析の結果、ウルボスピニル（理論化学組成： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）と同定された。暗灰色で長柱状の鉱物はMgO（酸化マグネシウム）を数%含んだファヤライト（符号：F）、マトリックスは非晶質珪酸塩（符号：S）からなり、ウスタイト（理論化学組成： $\text{FeO}$ ）は確認できなかった。一方、図版1-5はこの鉄滓の底部に近い領域の組織で、構成鉱物は同様であり組成も前記の組織とほぼ同様であるが、それぞれの結晶粒子は小さくなっている。この部分（底部）の凝固速度が速かったことを物語っている。

この鉄滓が溶融状態から凝固する際、最初に析出する鉱物相は構成鉱物から見てウルボスピニル（ $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）と考えられる。したがって、この鉄滓の（融液中の）酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）濃度は少なく見ても10%以上とみられる。また、図版1-5中に存在する球状白色結晶は金属鉄（Fe）で、形状からみて湯玉（金属鉄粒子）である。他にも数箇所存在することから、この鉄滓は鉄浴表面の活発なガス発生を伴った状況下、すなわち大鍛冶（精錬）操作過程で生成したものと考えられる。

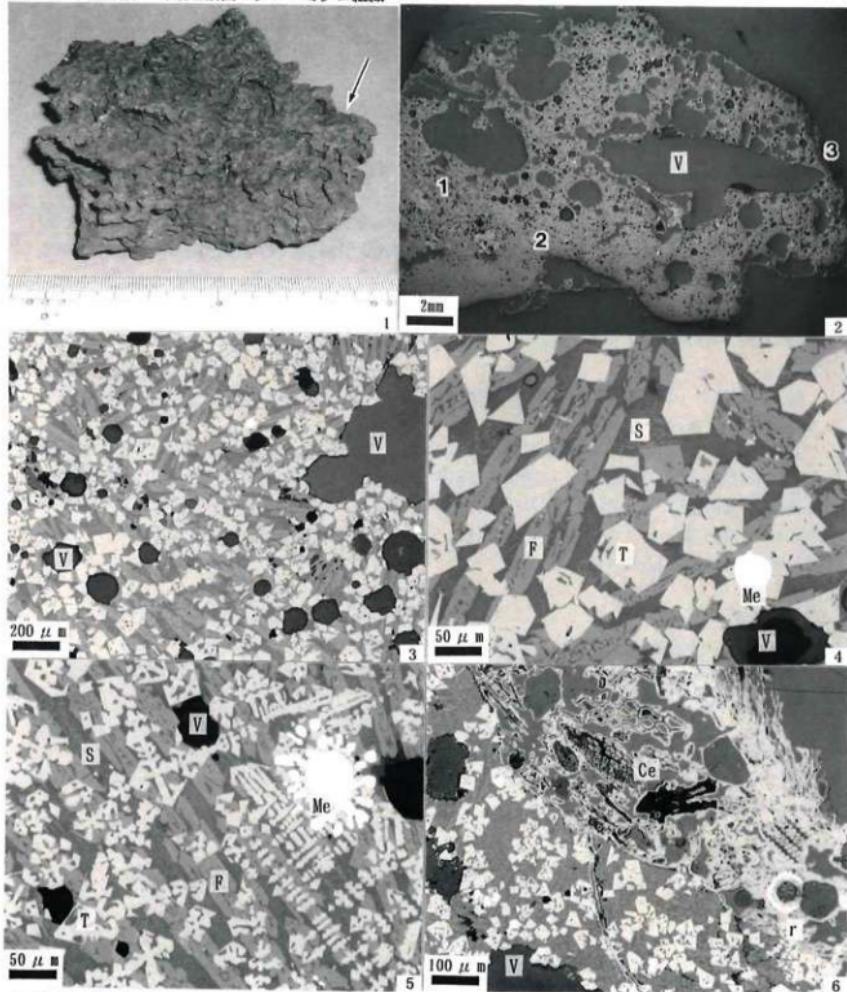
図版1-6には、この鉄滓端部に付着した植物繊維の炭化したもの（符号：Ce）を示した。恐らく木草類と思われる。

本操作過程でどのような素材（原料）が使われたのかいまのところ定かではないが、本造構周辺には5号や鉄滓溜り（流動津）の遺構が確認されていることから、製鉄炉でできた銑鉄（ずく）あるいは鉄滓を多く巻き込んだ錘（けら）が使用されたことが推定される。いずれにしろ、末分離の鉄分（酸化鉄）が少ないと（歩留り良好）、また比較的均質な組織を呈することから、精錬技術は高かったものと考えられる。

#### 4. まとめ

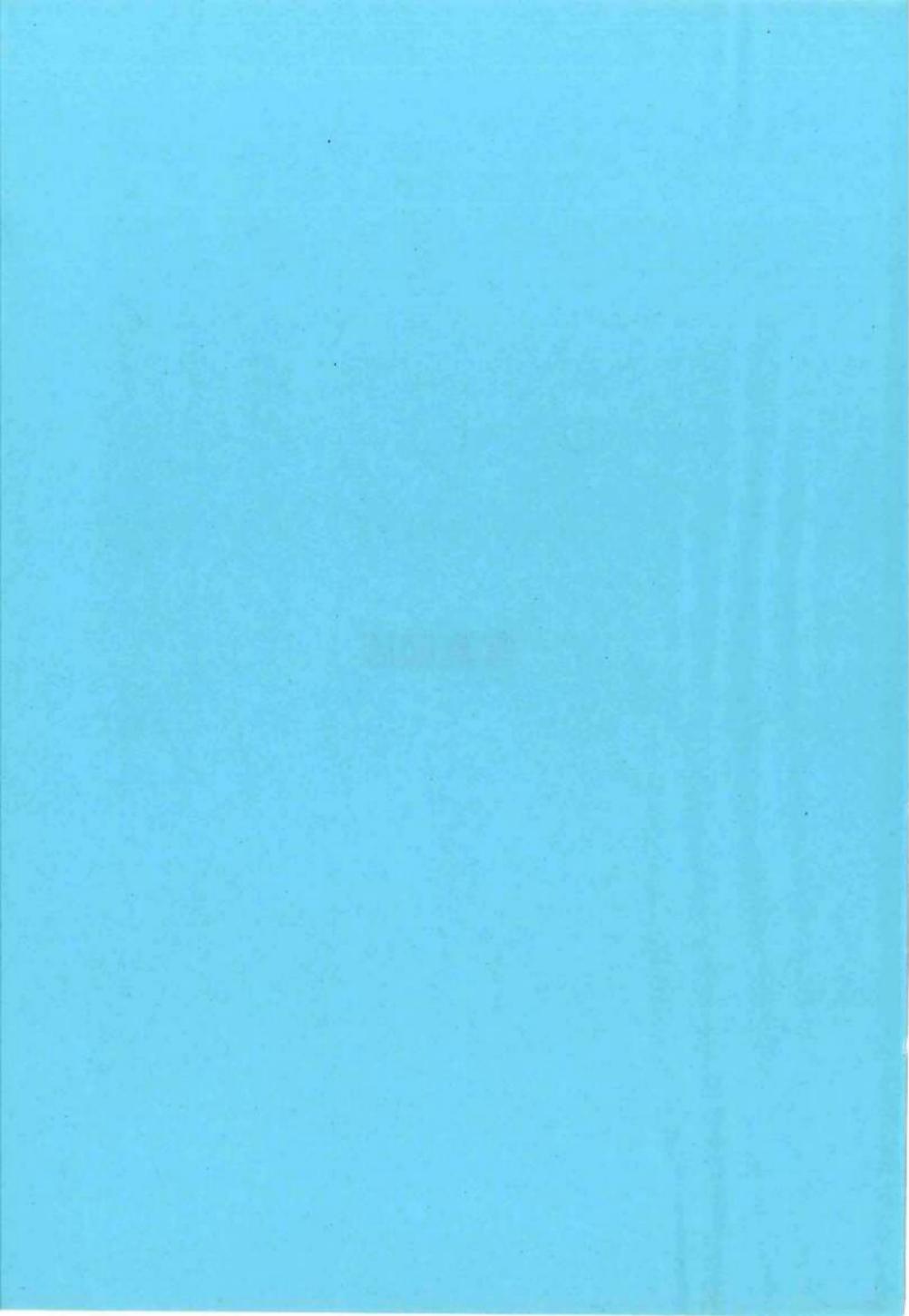
- 4号プラン内から出土した鉄滓の成分分析を行った結果、以下のことが推定された。
- 1) 比較的均質な組成を有する鉄滓で、マクロ・ミクロ構造および鉱物組成から大鍛冶（精錬）操作過程で生成したものと考えられた。
  - 2) チタン化合物の含有量が多いことから、本操作で使用された素材は製鉄炉で生産された、砂鉄を始発原料とした銑鉄あるいは鉄滓を多く巻き込んだ錘が使用されたものと考えられた。

図版1 出土鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織



1:外観、2:断面マクロ組織、3,4:2-1部拡大、5:2-2部拡大、6:2-3部拡大。  
Me:金属鐵、T:チタン化合物、F:ファヤライト ( $2\text{FeO}\text{-SiO}_2$ )、S:非晶質硅酸塩  
Ce:植物繊維、I:鐵鏽、V:空孔。  
矢印:調査試料の採取箇所。

## 写真図版





調査地遠景



発掘調査状況（南側畠地）



発掘調査状況（南側畠地）



1 トレンチ調査状況



2 トレンチ調査状況



4 トレンチ調査状況

調査状況（1）

図版 2



遺構検出状況



遺構検出状況



5号検出状況



5号



2号検出状況



3号検出状況

調査状況（2）



4号・5号・Y検出状況



4号検出状況



4トレンチ遺構検出状況



4トレンチ調査状況



4トレンチ調査状況



4トレンチ調査状況

調査状況（3）

図版 4



鉄 淬



1

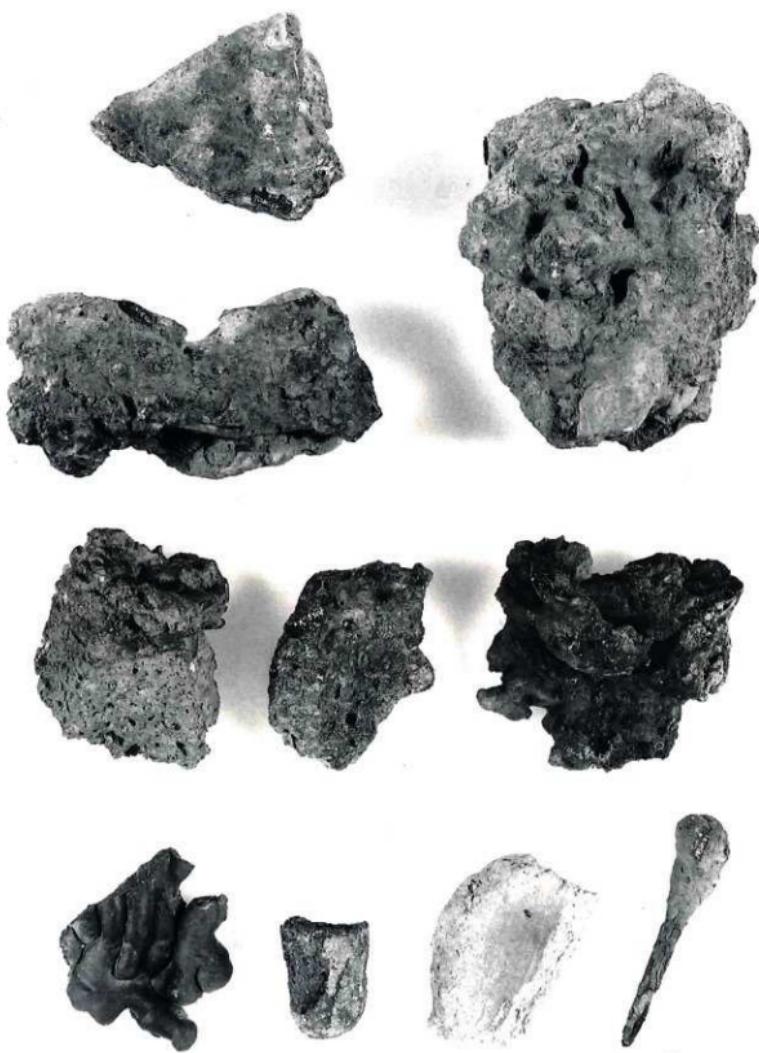
4

3

2

鉄 製 品

2 トレンチ出土遺物

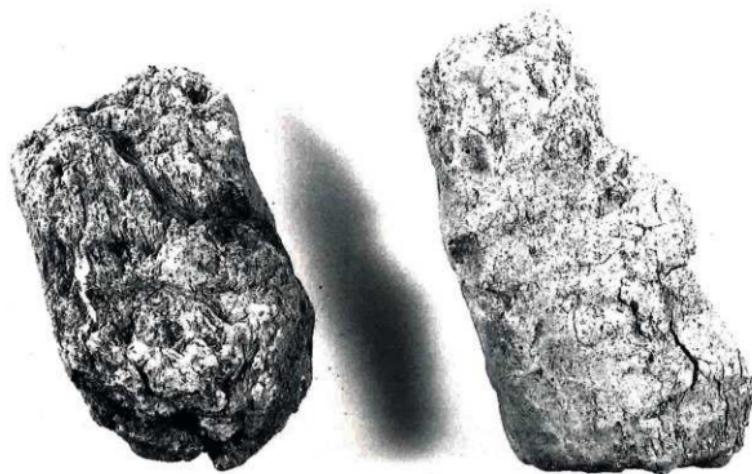


5

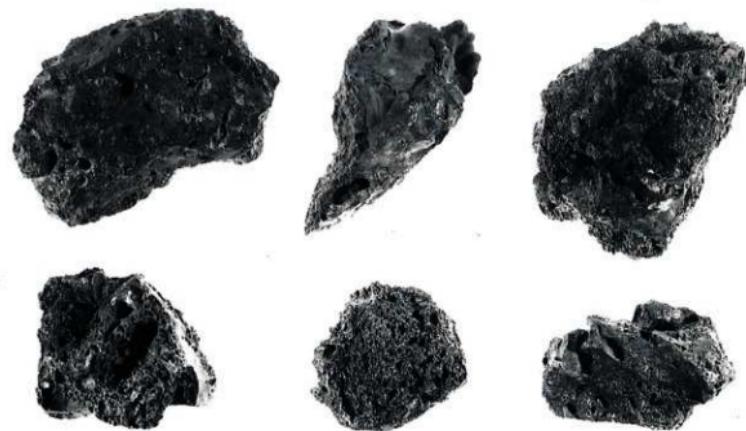
鉄滓・羽口・釘

4 トレンチ出土遺物

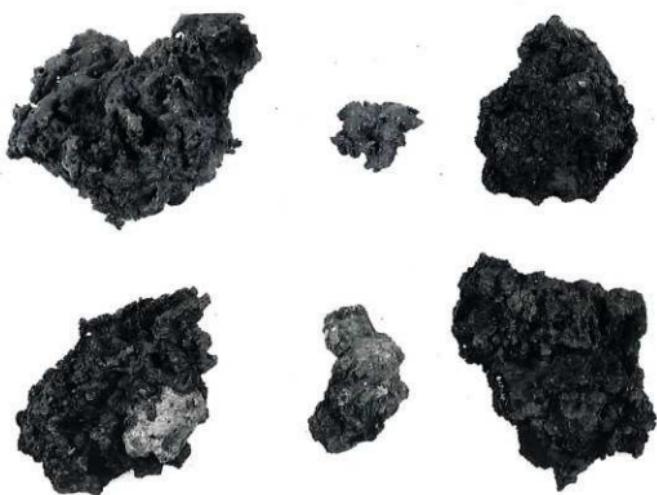
図版 6



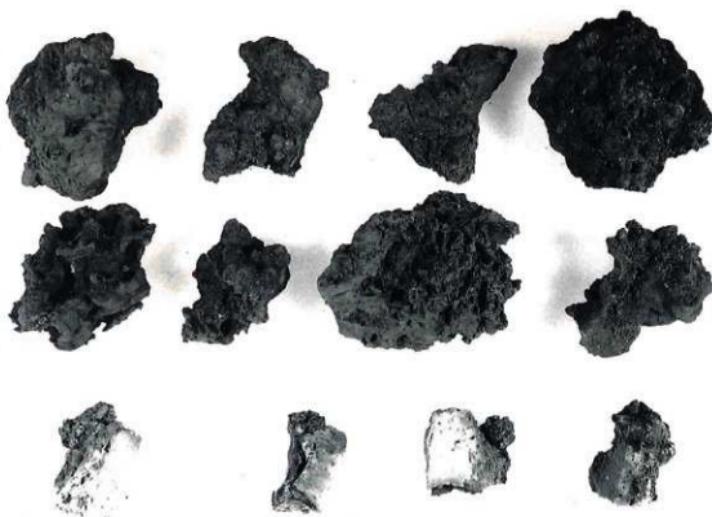
4 トレンチ出土遺物



1 号造構内出土遺物

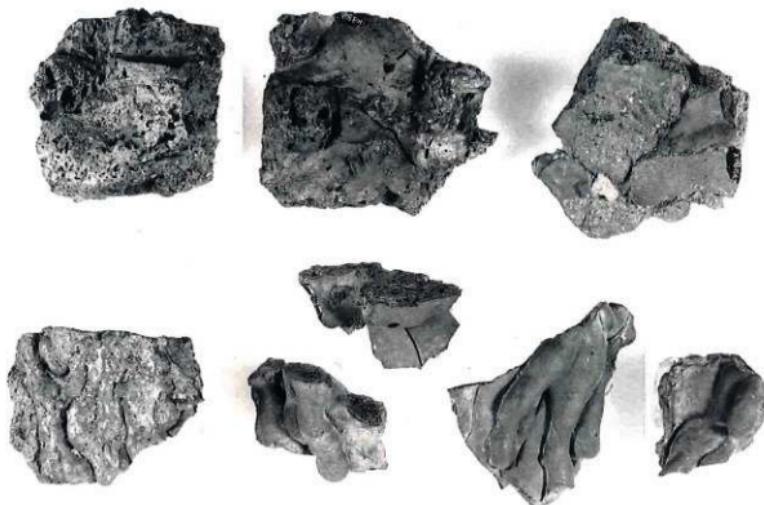


4号内

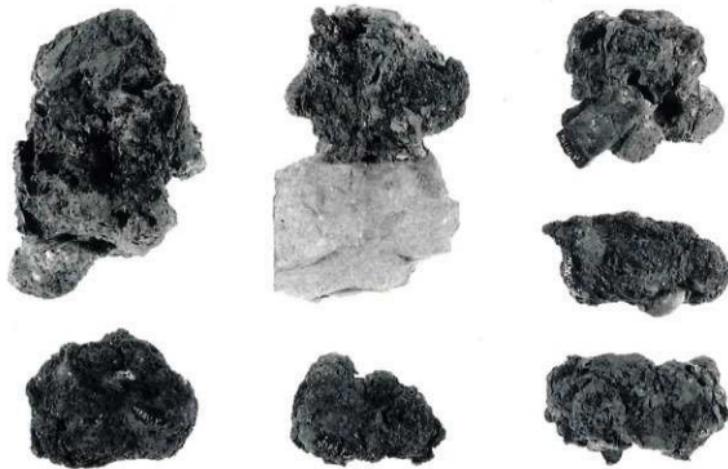


5号内

遗构内出土遗物 (1)



X内

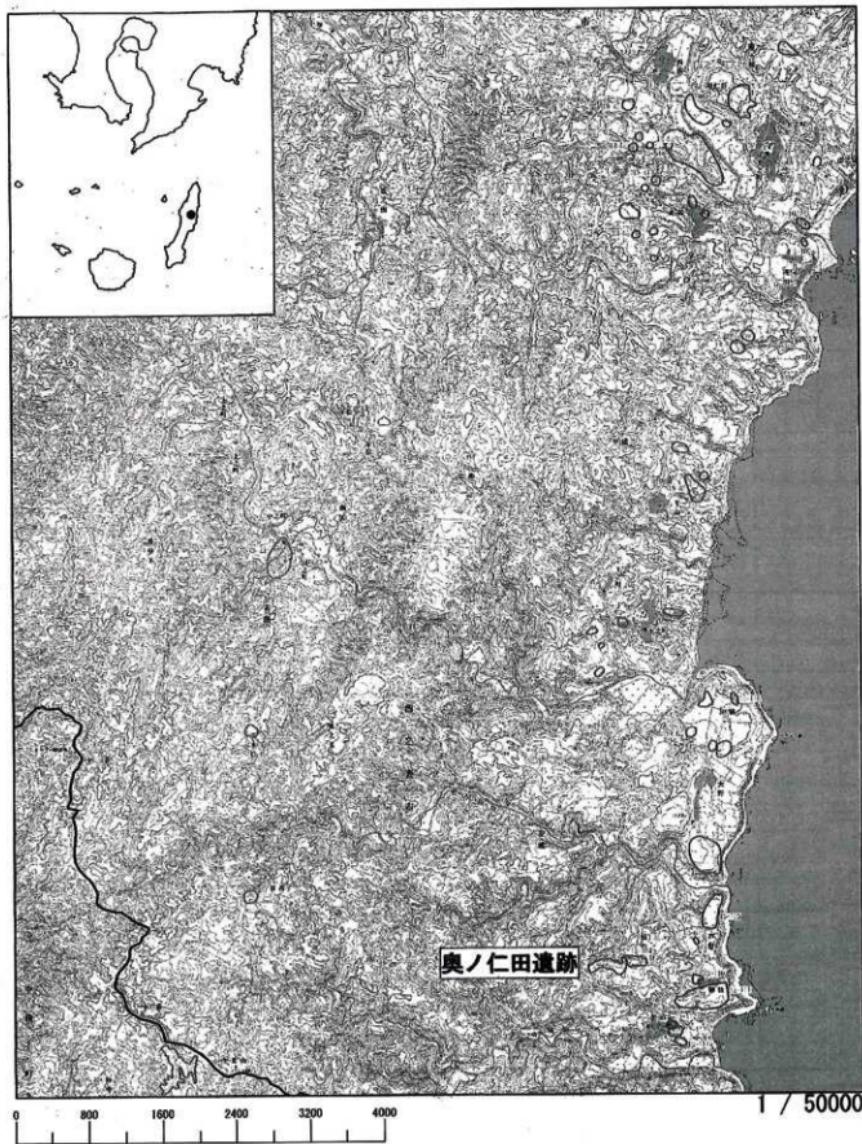


Y内

遺構内出土遺物 (2)

# 奥ノ仁田遺跡





第1図 奥ノ仁田遺跡位置図

## 第Ⅰ章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成5年、西之表市教育委員会は過疎基幹農道整備事業（立山地区）に伴う奥ノ仁田遺跡の発掘調査を鹿児島県立埋蔵文化財センターの調査支援を受け実施した。調査の結果、縄文時代草創期の多量の遺物・遺構が発見され南九州の縄文時代草創期を代表する遺跡の一つとなり、出土品の一部は平成11年3月鹿児島県の文化財に指定された。

奥ノ仁田遺跡の発掘調査を行った範囲が農道工事部分に係る限られた範囲であったため、西之表市教育委員会は奥ノ仁田遺跡の詳細な範囲を探るために、詳細分布調査を計画し、平成12年度に市単独予算で10日間の調査を行い、平成13年度は国・県の補助を受け前年度に引き続き詳細分布調査を行うこととなった。調査後の整理・報告書作成作業は平成15年度に行った。

### 第2節 調査の組織

#### （発掘調査）

発掘調査主体者 西之表市教育委員会

発掘調査責任者 西之表市教育委員会 教育長 有島 正之

発掘調査企画担当 西之表市教育委員会 文化課 課長 浦口 安雄  
課長補佐 奥村 学

発掘調査担当 西之表市教育委員会 文化課 主事 沖田純一郎

発掘調査作業員 徳田 香・徳田恵子・中村 始・武田芳子・宮野みどり・中村桂子  
江口幸路・安藤美津子

整理作業員 中村桂子・江口幸路・安藤美津子・桑原とも子

#### （整理作業）

発掘調査主体者 西之表市教育委員会

発掘調査責任者 西之表市教育委員会 教育長 有島 正之

発掘調査企画担当 西之表市教育委員会 社会教育課 課長 阿世知猛雄  
” 総括課長補佐 奥村 学

整理作業担当 西之表市教育委員会 社会教育課 主事 沖田純一郎

整理作業員 安藤美津子

### 第3節 調査の経緯

調査は平成14年1月17日から1月30日まで行った。調査対象地内の畠地内にトレンチを設置し、掘り下げは基本的に人力で行った。トレンチの大きさは遺物の出土状況、土層確認のため適宜変更するなどした。以下調査の経過については日誌抄をもってかえる。

1月 17日（木）	1 トレンチ設置。東側半分を人力にて掘り下げ。 表土より土器片出土。 ベージュ色ローム層より土器片出土。立山農協支所長来跡。
18日（金）	1 トレンチ掘り下げ。 ベージュ色ローム層より土器片出土。
21日（月）	1 トレンチ掘り下げ。 土器片・磨石出土。2・3 トレンチ設置。
22日（火）	2・3 トレンチ掘り下げ。3 トレンチより土器片出土。 1 トレンチ掘り下げ。
23日（水）	2・3 トレンチ掘り下げ。3 トレンチより土器片出土。 1 トレンチ土層断面精査・分層作業。
24日（木）	3 トレンチ掘り下げ。 2・3 トレンチ配置図平板測量。 1・3 トレンチ平板・レベル遺物取りあげ。
25日（金）	1・2 トレンチ写真撮影。4・5・6・7 トレンチ設置掘り下げ。 浦口文化課長、奥村文化課長補佐来跡。
28日（月）	1～5 トレンチ土層断面精査。1～6 トレンチ清掃、写真撮影。 7 トレンチ掘り下げ。1 トレンチ東側重機により深掘り実施。 各トレンチ配置図平板測量。
29日（火）	1・7 トレンチ拡張掘り下げ。 7 トレンチ配置図平板測量。 重機により2～6 トレンチ埋め戻し。
30日（水）	1・7 トレンチ清掃、写真撮影。 1・7 トレンチ重機により埋め戻し。 道具後片付け。調査終了。奥村文化課長補佐来跡。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

### 第1節 遺跡の位置

奥ノ仁田遺跡は大隈半島の最南端である佐多岬の東南海上約54kmに位置する種子島西之表市に所在する。種子島から薩南諸島・さらに奄美・沖縄諸島と蜿蜒1,200kmの海の飛び石が続き、これらの島々には南から北へと黒潮が走っている。

種子島は南北52km、東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高が約282mしかない低平な島で、隣に位置する屋久島とは対照的である。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町の1市2町からなる。奥ノ仁田遺跡は西之表市の東南部にあり、太平洋に臨む標高約133mの台地上に立地する。

これまでの発掘調査により種子島は貴重な遺跡が多数発見され、関係者から注目を浴びる島となってきた。旧石器時代では約3万年前の礫群が検出された横峯遺跡（南種子町）・石器、礫群等の生活遺構が検出された立切遺跡（中種子町）などがある。縄文時代になると草創期では本土以外で初めて隆帶文土器が出土しその遺物の量・質で全国的に有名になった奥ノ仁田遺跡、多数の生活遺構や多量の隆帶文土器が出土した三角山遺跡（中種子町）・鬼ヶ野遺跡（西之表市）などがある。

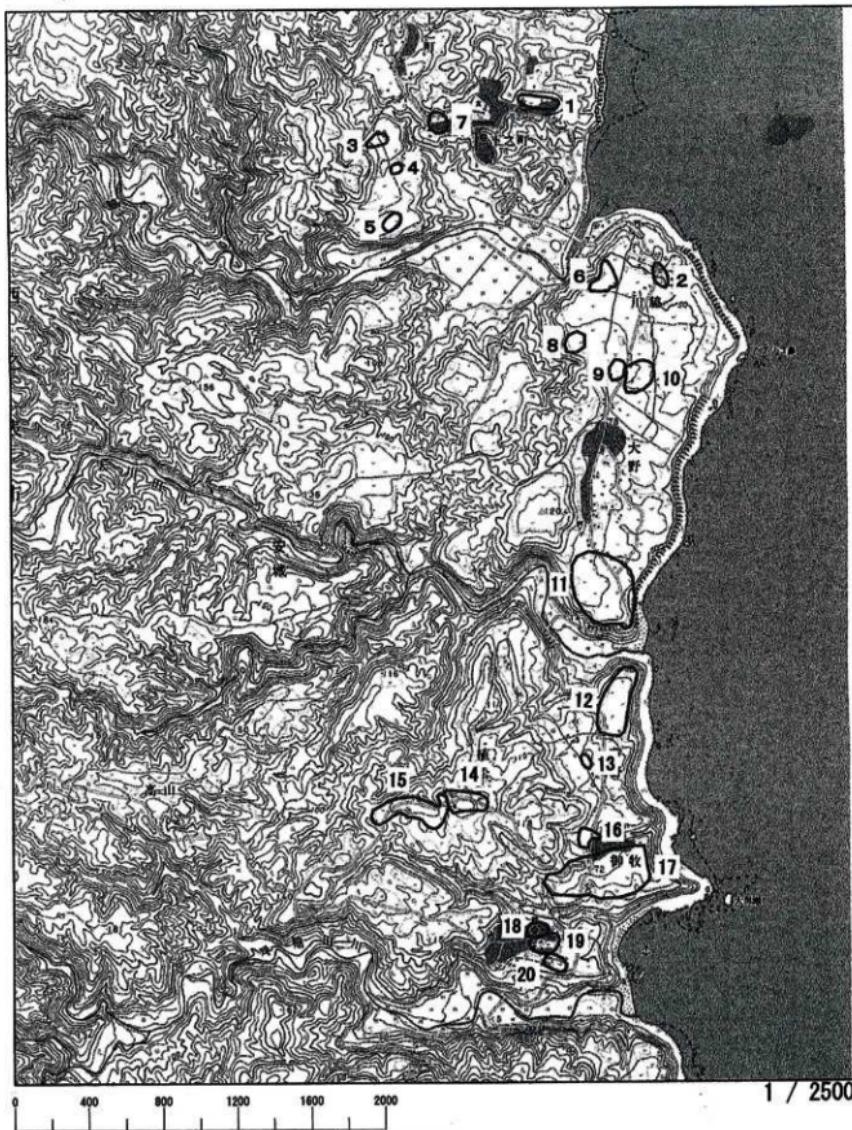
早期では多数の報告例があり、これまで早期前葉とされる前平式の出土例はなかったが、最近の発掘調査ではこの前平式の出土があり、本土と同じ土器文化の変遷になることが明らかとなってきたが、量的には前平式に続く吉田式段階以降のものが大多数を占める。他、下剥峯式・桑ノ丸式・押形文土器・手向山式・苦浜式・塞ノ神式・平柄式等が報告されている。

前期では轟式・曾畠式の出土が報告されている。中期の様相は不明な点が多く、遺跡の数も現時点では皆無に等しい。後期では指宿式・一ツ瀬式・市来式・納曾式・磨消繩文・綾式などの報告例がある。晚期では黒川式の報告例がある。

弥生時代・古墳時代の著名な遺跡としては多くの貝製品と多数の人骨が出土した広田遺跡（南種子町）や覆石墓が多数検出された鳥之峯遺跡（中種子町）などがある。これらはいずれも砂丘に立地する埋葬遺跡であり、田ノ脇遺跡・椎ノ木遺跡・小浜遺跡・上浅川遺跡（いずれも西之表市）等も砂丘に位置する埋葬遺跡である。埋葬遺跡の他ではこれまで種子島・屋久島のみに出土している極めて地域性の強い土器とされる上能野式土器が出土した、上能野貝塚・嶽ノ中野遺跡・太田遺跡などがある。古墳時代以降については発掘調査例や表面採集資料も少ないため未解明な点が多いのが現状である。

### 第2節 遺跡の環境

奥ノ仁田遺跡が所在する西之表市の東南海岸沿いは近年の開発事業のため毎年発掘調査が行われ、遺跡の数も増加してきている。周辺は小さな谷が入り組み、その間に地図には記載されないほどの小川が流れしており、遺跡は一段高い台地の上に立地する傾向が見られる。遺跡の時代は縄文時代草創期・早期が大多数を占める。今後も発掘調査の計画があり、良好な資料や生活遺構が検出される可能性がある。



第2図 奥ノ仁田遺跡と周辺遺跡図

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	仮屋園	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成10年農政分布調査
2	通利山	西之表市安城上之町	縄文時代	平成13年県道分布調査 平成15年試掘調査
3	鬼ヶ野A	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
4	鬼ヶ野B	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
5	鬼ヶ野	西之表市安城上之町	縄文時代草創期	平成13年発掘調査
6	日守C	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
7	三本松	西之表市安城川脇	縄文時代早期	平成13年県道分布調査 平成15年確認調査
8	日守B	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
9	日守	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成7・8年発掘調査
10	長迫	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成13年試掘調査
11	東前平	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成14年確認調査 II地点 平成14年発掘調査 I地点 平成15年発掘調査
12	芦野	西之表市立山芦野	縄文時代早期	平成14年確認調査
13	九郎三エ門	西之表市立山芦野	縄文	平成3年農政分布調査
14	奥嵐	西之表市立山植松	縄文時代早期	平成5年発掘調査
15	奥ノ仁田	西之表市立山植松	縄文時代草創期・ 早期	平成5年発掘調査 出土品は県文化財
16	尾呂ノ平	西之表市立山御牧	縄文	平成13年県道分布調査
17	長崎	西之表市立山御牧	縄文	平成13年県道分布調査
18	中國A	西之表市立山立山	縄文	平成13年県道分布調査
19	中國B	西之表市立山立山	縄文	平成13年県道分布調査
20	下ノ平	西之表市立山立山	縄文	平成13年県道分布調査

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 調査方法

調査は平成14年1月17日から1月30日まで実施した（調査10日間）。トレンチは農道部分より更に数十メートル南側に入った畑地を中心に7箇所設定し調査を行った。調査面積は約105m<sup>2</sup>となつた。

### 第2節 層位

土層は場所によって一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。

I層 表土

II層 黒色土

III層 黄橙色火山灰層 アカホヤ火山灰層、約6,400年前の鬼界カルデラ噴出物

IV層 ベージュ色ローム土 遺物包含層（縄文時代早期）

V層 暗褐色土

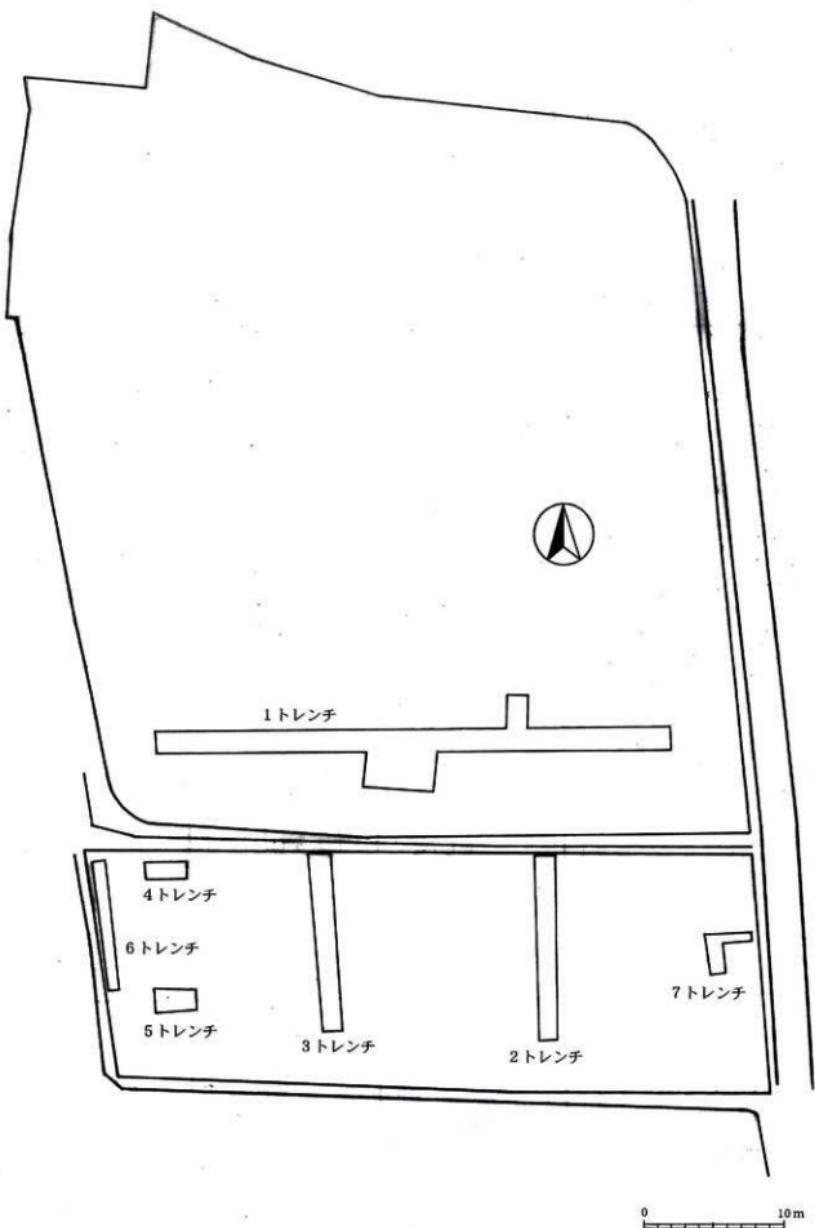
VI層 暗黄色ローム層 粘質が強い（下位には小片の砂岩が散在する）

VII層 岩盤

今回の調査では種子島において標準的に堆積している、AT火山灰層・種IV・種III・種II・種I等の火山灰層は確認されなかった。

### 第3節 各トレンチの調査

各トレンチの大きさ、掘り下げの深さ、遺構・遺物の出土状況は第2表のとおりである。遺物は1・2・3トレンチで出土した。遺構は1トレンチで近代の炭窯と思われるものが土層断面で検出されたが、縄文時代相当の遺構はいずれのトレンチからも検出されなかった。以下、トレンチごとに調査の概要を述べる。



第3図 レンチ配置図

## 1トレンチ

調査地北側に1.5m×34mの大きさで東西に細長く設置した。掘り下げは表土を重機で除去した後、人力で行った。今回の調査トレンチの中で最大のものである。下層確認のため一部拡張を行った。遺物の出土はこの1トレンチが主なもので土器片・石器18点が出土した。土層は表土（約28cm）・旧表土（10cm）・アカホヤ火山灰層（32cm）・ベージュ色ローム層（30cm）・岩盤と続く。出土遺物は全てベージュ色ローム層からである。種子島の標準的な土層はアカホヤ火山灰層からベージュ色ローム層その後さらにローム層・ATローム層・種IV・III・II・I火山灰層と堆積しているが、今回の調査地点ではベージュ色ローム層のあとはすぐに岩盤となつた。またこの岩盤面からは一部水が涌いてきた。

## 2トレンチ

調査地南側の畠地に1.5m×12mの大きさで設置した。掘り下げは全て人力で行った。土層は表土（15cm）・アカホヤ火山灰層（15cm）・ベージュ色ローム層（27cm）以下岩盤である。遺物は北側壁面より土器片1点が出土した。アカホヤ火山灰層下位のベージュ色ローム層からの出土である。東側にいくにつれアカホヤ火山灰は一部削平を受けていることが確認された。

## 3トレンチ

2トレンチの西側に、1.5m×11.5mの大きさで北から南へと細長く設置した。土層は表土（32cm）・アカホヤ火山灰層（8cm）・ベージュ色ローム層（31cm）以下岩盤と続く。遺物は土器片が3点出土した。いずれもアカホヤ火山灰層下位のベージュ色ローム層からである。掘り下げは表土を重機で除去した後、人力で行った。

## 4トレンチ

3トレンチの西側に2.8m×1mの大きさで設置し、掘り下げは人力で行った。土層は表土（38cm）・アカホヤ火山灰層（22cm）・ベージュ色ローム層（20cm）・以下岩盤と続く。このトレンチからは遺物は出土しなかつた。

## 5トレンチ

4トレンチ南側に1.5m×3mの大きさで設置し、掘り下げは人力で行った。土層は表土（48cm）・アカホヤ火山灰層（23cm）・ベージュ色ローム層（12cm）以下岩盤と続く。遺物は出土しなかつた。

## 6トレンチ

4・5トレンチの西側に1.0m×8.5mの大きさで設置し、掘り下げは人力で行った。土層は表土（60cm）・アカホヤ火山灰層（25cm）・ベージュ色ローム層（22cm）以下岩盤と続く。アカホヤ火山灰層が厚く堆積し、土層の堆積状況も良好であったが、遺物は出土しなかつた。

## 7 トレンチ

2 トレンチ東側に1.0m×2.5mの大きさでL字型に設置し、掘り下げは人力で行った。土層は表土（60cm）・アカホヤ火山灰層（8cm）・ベージュ色ローム層（11cm）以下小片の砂岩層（岩盤）と続く。アカホヤ火山灰層は一部削平を受けている。遺物は出土しなかった。

第2表 トレンチ調査状況

トレンチ No	大きさ (m)	遺構	遺物	遺物までの 深さ (cm)	トレンチの 深さ (cm)	備 考
1	1.5×34	×	○	7 5	2 0 9	土器片・石器
2	1.5×12	×	○	2 8	6 0	土器片
3	1.5×11.5	×	○	4 4	6 6	土器片・石器
4	2.8×1.0	×	×	—	8 5	
5	1.5×3	×	×	—	8 3	
6	1.0×8.5	×	×	—	1 2 9	
7	1.0×2.5	×	×	—	5 5	

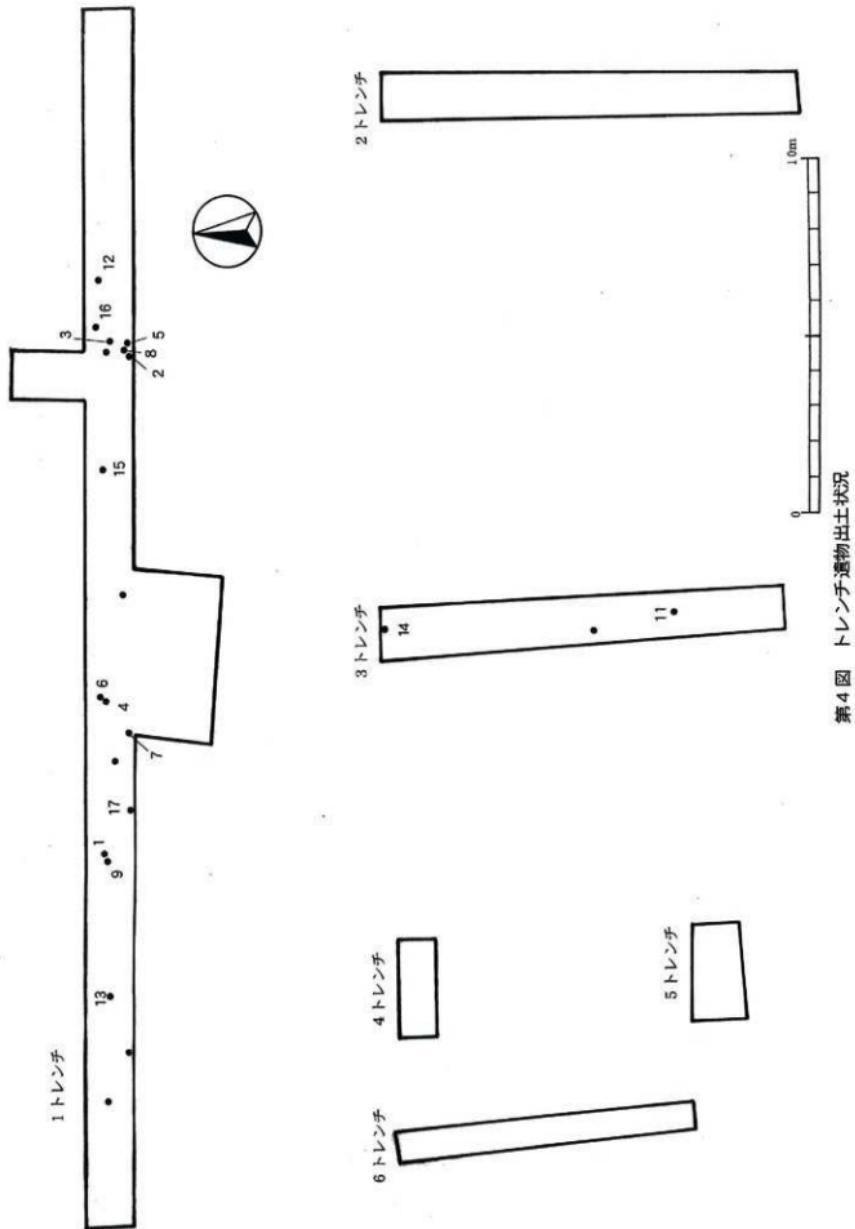
## 第4節 遺構

今回の調査では1トレンチで表土層より、近代の炭窯と思われるものが1基確認されたのみで、いずれのトレンチからも縄文時代等の遺構は検出されなかった。

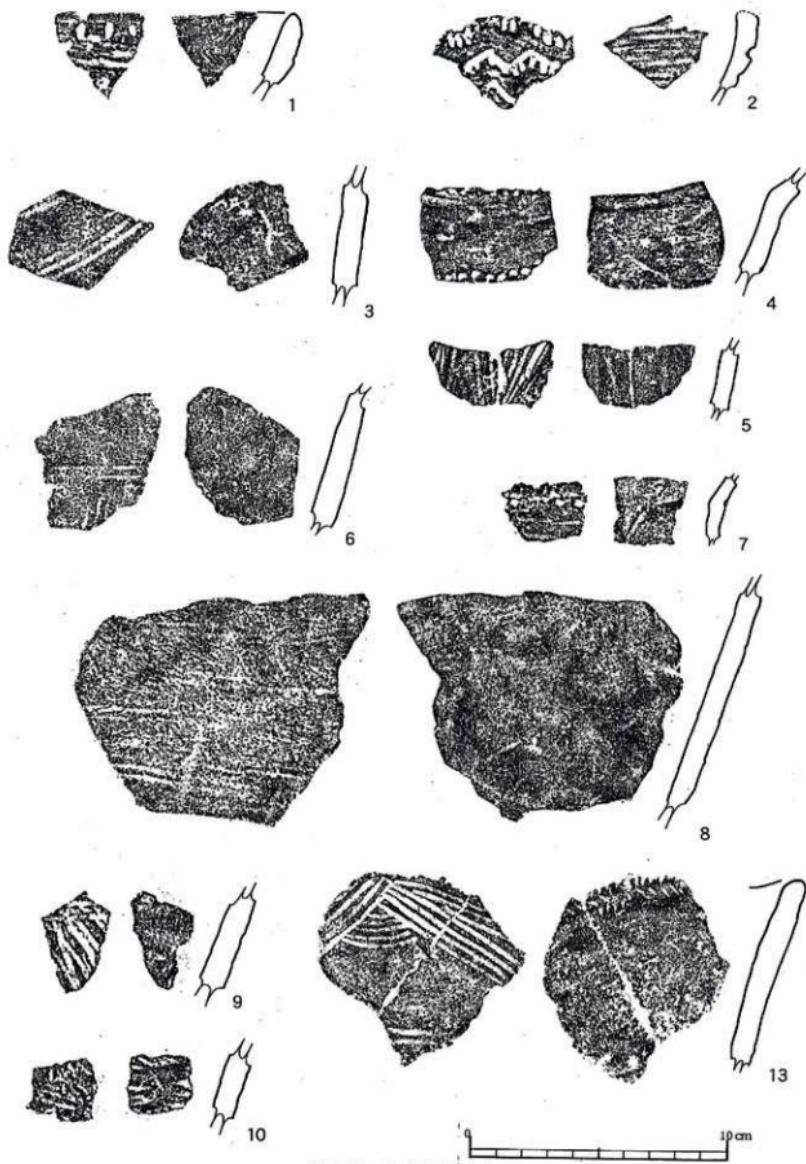
## 第5節 遺物

遺物はパンケース1箱分出土した。主に1トレンチから出土したものである。1・2は口縁部である。1は口唇部近くに縦に刻みが見られ、下位に沈線を施している。胎土に砂粒を多く含んでいる。2は口唇部に刻みを持ち下位には幅広のM字状の刺突文が施され、稜を持つと思われる。内面は貝殻条痕文で調整を施している。3は外面に斜位の貝殻条痕文を施している。4は外面に棒状の工具での刺突文が見られる。5、6はいずれも外面に貝殻条痕文が見られる。7は胎土に金雲母を含んでいるのが特徴的である。8は磨耗のためはっきりしないが、貝殻条痕文を外面に施している。9は深めの貝殻条痕文が見受けられる。10は外面・内面ともに貝殻条痕文が施されている。11は外面に貝殻の腹縁部を縦位に、横位方向に連続的に刺突を施している。13は口縁部であり、稜を持つものである。口唇部に刻みを持ち、外面には貝殻条痕文が施されている。14も口縁部で、口唇部付近に円状の小さな刺突文があり、約2cm下位にも同じような刺突文を施し、その間に貝殻条痕文を施すものである。

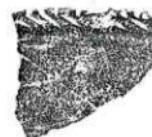
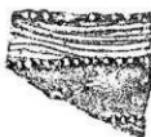
石器はすべて1トレンチから出土した。いずれも磨石・敲石類である。15・17は磨石である。16は磨り・敲きの痕跡が見られる。石材はいずれも砂岩である。



第4図 トレンチ遺物出土状況



第5図 出土遺物(1)

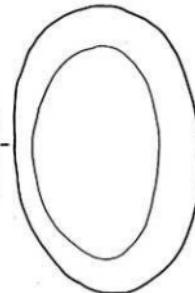
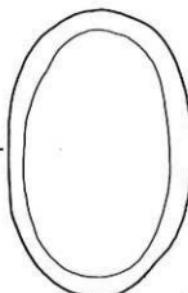


11

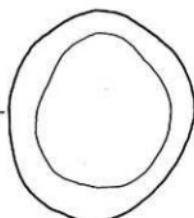
14



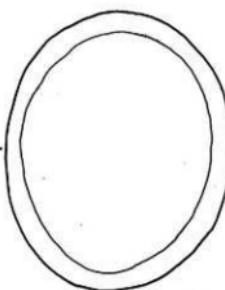
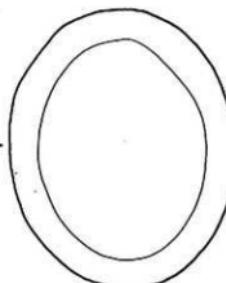
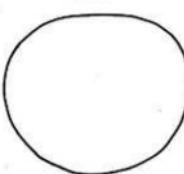
12



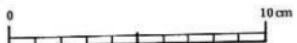
15



16



17



第6図 出土遺物(2)

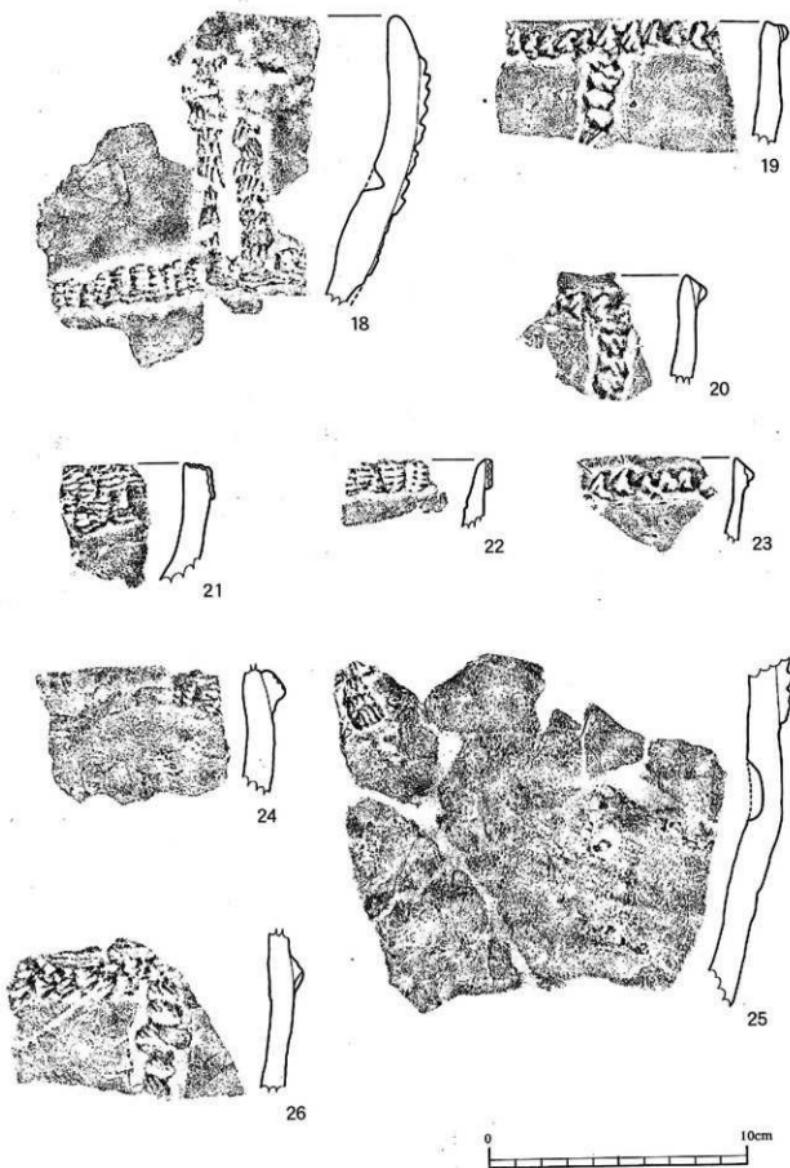
18から33は平成12年度の詳細分布調査で出土した土器である。18～31は隆帯文土器である。土器の外面に縦位、横位方向に1条ないし2条の隆帯を施すものである。隆帯の上には貝殻や工具類などで施文を行っている。32・33は外面に貝殻刺突文・条痕文が施されており、ともに口縁部がラッパ状に外反するもので、塞ノ神式土器の範疇に入るものと思われる。33と11は同一個体と見られる。

第3表 土器観察表

挿図	番号	取上番号	色 調		胎 土	備 考
			外 面	内 面		
5	1	1T 15	茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	口縁部
	2	1T 6	黒褐色	乳茶褐色	石英・長石・砂粒	口縁部
	3	1T 3	黒褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	
	4	1T 11	乳茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	5	1T 14	乳茶褐色	黒褐色	石英・長石・砂粒	
	6	1T 10	乳茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	7	1T 12	茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 ・金雲母・礫	
	8	1T 5	乳茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	
	9	1T 16	茶褐色	黒褐色	石英・長石・砂粒	
	10	1T表採	茶褐色	黒褐色	石英・長石・砂粒	
6	11	3T 20	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒	口縁部
	12	1T 1	灰黒褐色	灰黒褐色	石英・長石・砂粒	
5	13	1T 17	乳茶褐色	明茶褐色	石英・長石・砂粒 ・金雲母	
	6	14	3T 22	明茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒
						口縁部

第4表 石器観察表

挿図	番号	器 種	取上番号	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石 材
6	15	磨石	1T 8	11.1	7.2	6.2	710	砂岩
	16	磨石・敲石	1T 2	8.3	7.2	4.1	330	砂岩
	17	磨石	1T 14	10.3	8.7	4.7	670	砂岩



第7図 平成12年度出土遺物（1）



27



28



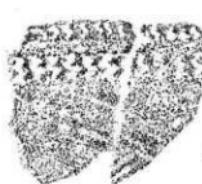
29



30



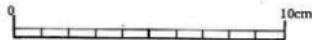
31



32



33

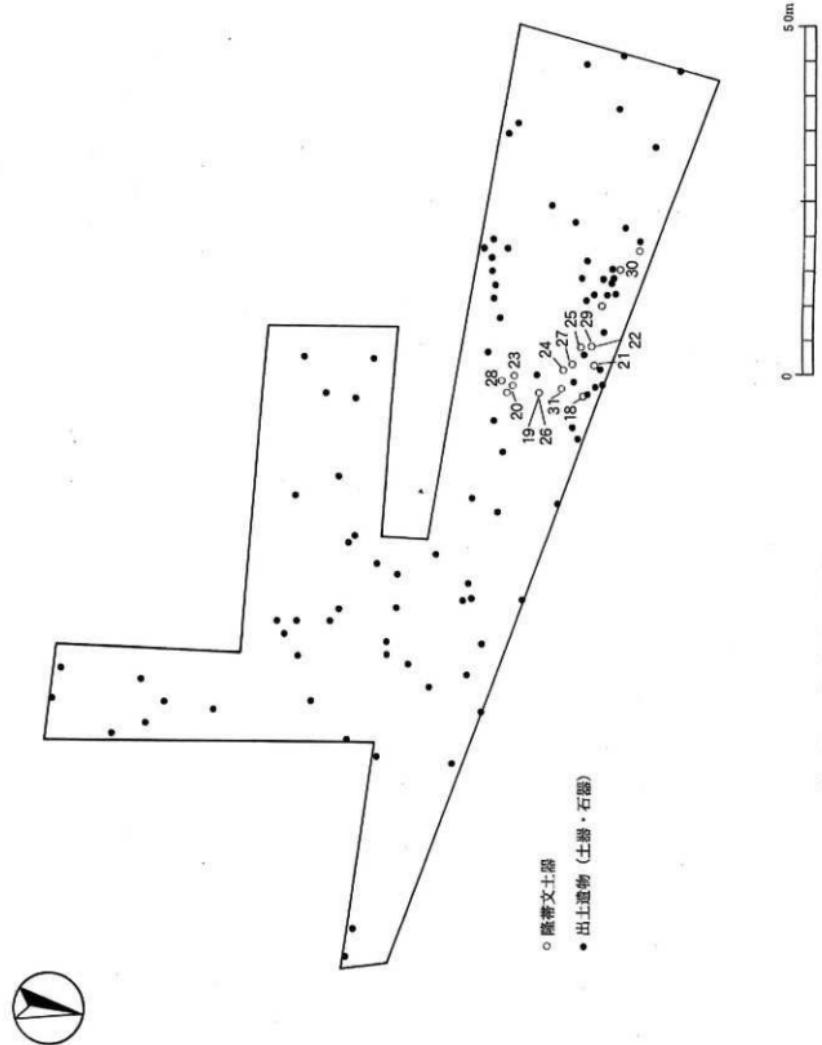


第8図 平成12年度出土遺物（2）

第5表 土器觀察表

挿図	番号	取上番号	色調		胎土	備考
			外面	内面		
7	1 8	3 6	暗黄茶褐色	暗黄茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	口縁部
	1 9	3 8	暗黒褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	口縁部
	2 0	9 6	暗黒褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	
	2 1	2 9	暗茶褐色	明茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	口縁部
	2 2	9 4	暗黄茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	口縁部
	2 3	4 0	暗黄茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	口縁部
	2 4	3 3	暗黄茶褐色	明黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	2 5	7	黄茶褐色	明黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	2 6	3 8	明黄茶褐色	明黄茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	
8	2 7	3 2	明黄茶褐色	明黄茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	
	2 8	4 1	明黄茶褐色	明黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	2 9	9 4	暗黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	3 0	2 3	暗黄茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・砂粒	
	3 1	3 7	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・砂粒	
	3 2	F140/153	暗黒褐色	暗黄茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	口縁部
	3 3	F134/137/141/ 143/156	暗黒褐色	暗黄茶褐色	石英・長石・砂粒・礫	口縁部

第9図 平成12年度調査遺物出土状況（Aトレンチ）



## 第Ⅳ章 調査のまとめ

### 第1節 遺跡の範囲

平成13年度に調査を行った地点は塞ノ神式や貝殻条痕文土器が出土したことから、縄文時代早期の遺跡であることが確認された。平成5年度・平成12年度の調査結果から、縄文時代草創期の遺跡は現在の農道部分に東西ほぼ一直線状に長さ約150m幅約40mに渡って所在していたと思われる。平成5年度に農道部分の発掘調査を行った際すでに、北側・南側の畑地は削平を受けていたため農道部分以外の縄文時代草創期の主な遺物・遺構は滅失したと考えられる。

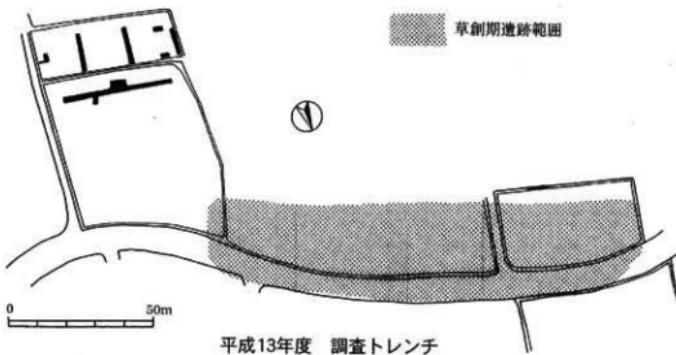
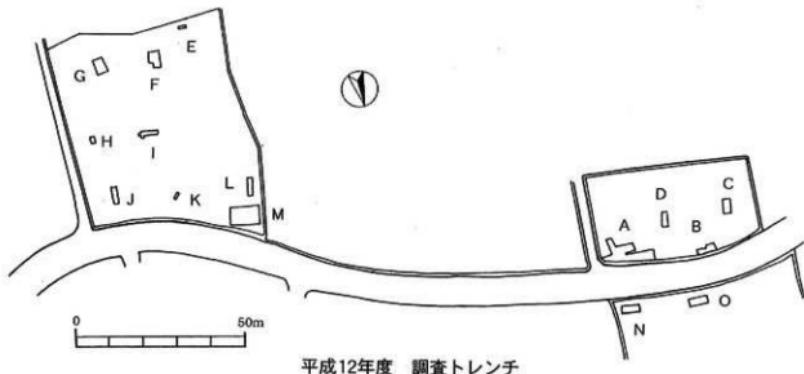
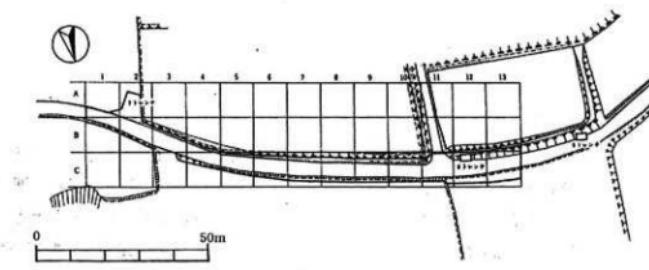
### 第2節 調査のまとめ

今回の詳細分布調査の結果、現在の農道南側の台地は縄文時代早期の遺跡が所在することが明らかとなった。

遺跡の立地する地形を見ると、奥ノ仁田遺跡の北側は谷であるため、北側に広がることは考えられず、南側に広がると想定されたが、調査の結果、塞ノ神式土器等、縄文時代早期相当の遺物が出土した。農道の南側の畑地が一部削平を受けているため詳細な範囲は不明であるが、農道を挟んで幅約40mほどであると思われる。

縄文時代草創期に奥ノ仁田遺跡を形成した人々は、台地の一段高い地点で生活していたと考えられ、後にその周辺部に縄文時代早期の遺跡が形成されたことが確認された。

縄文時代草創期と早期の遺跡の立地について重要な手がかりとなった。



第10図 調査地・遺跡範囲

# 写真図版

# 附錄



調査地遠景



発掘調査状況



1 レンチ調査状況



3 レンチ調査状況



1・3・4 レンチ調査状況



1 レンチ拡張部分調査状況

調査状況（1）

図版2



1 ドレンチ遺物出土状況



1 ドレンチ出土遺物



3 ドレンチ出土遺物



1 ドレンチ出土遺物



1 ドレンチ出土遺物



発掘調査風景

調査状況（2）



5 トレンチ調査状況



2 トレンチ調査状況



4 トレンチ調査状況



7 トレンチ調査状況



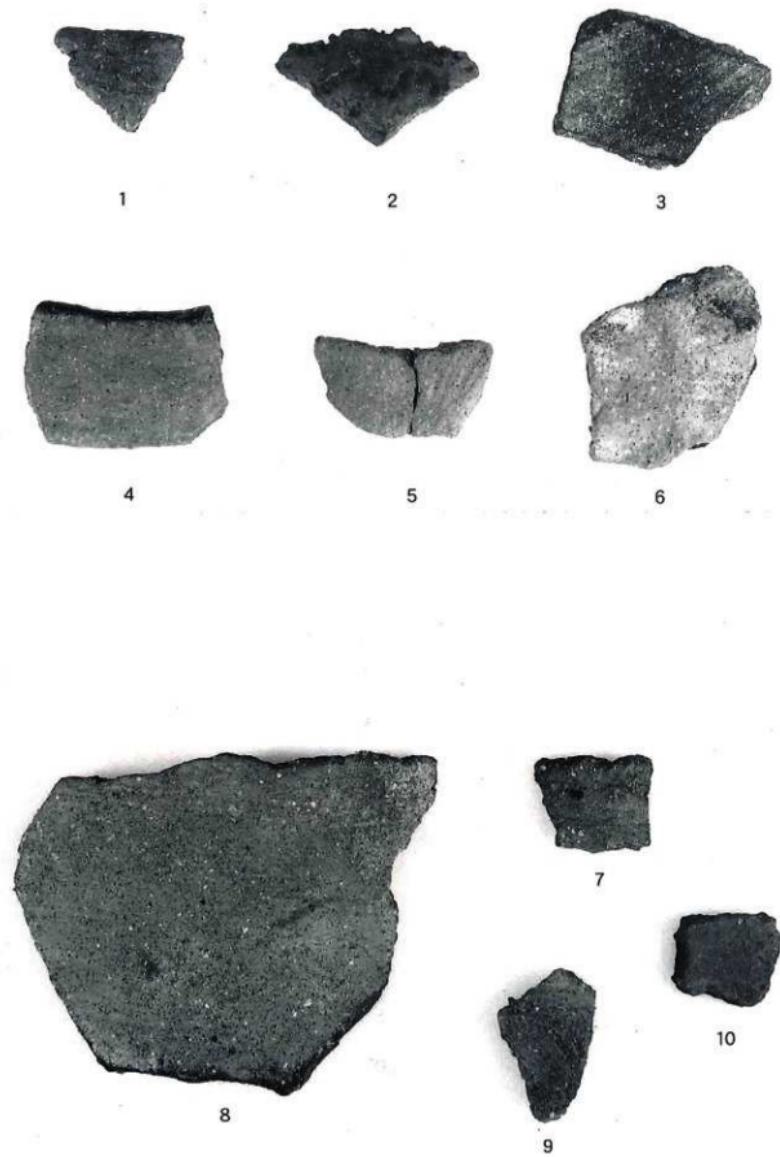
1 トレンチ調査状況



1 トレンチ拡張部分調査状況

調査状況（3）

図版 4



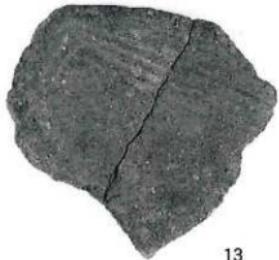
出土遺物 (1)



11



12



13



14



15



16



17

出土遺物（2）

图版 6



18



19



20



21



24



27

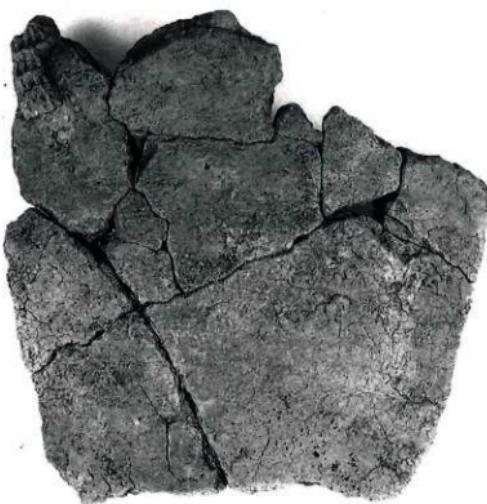


26



28

出土遗物 (3)



25



32

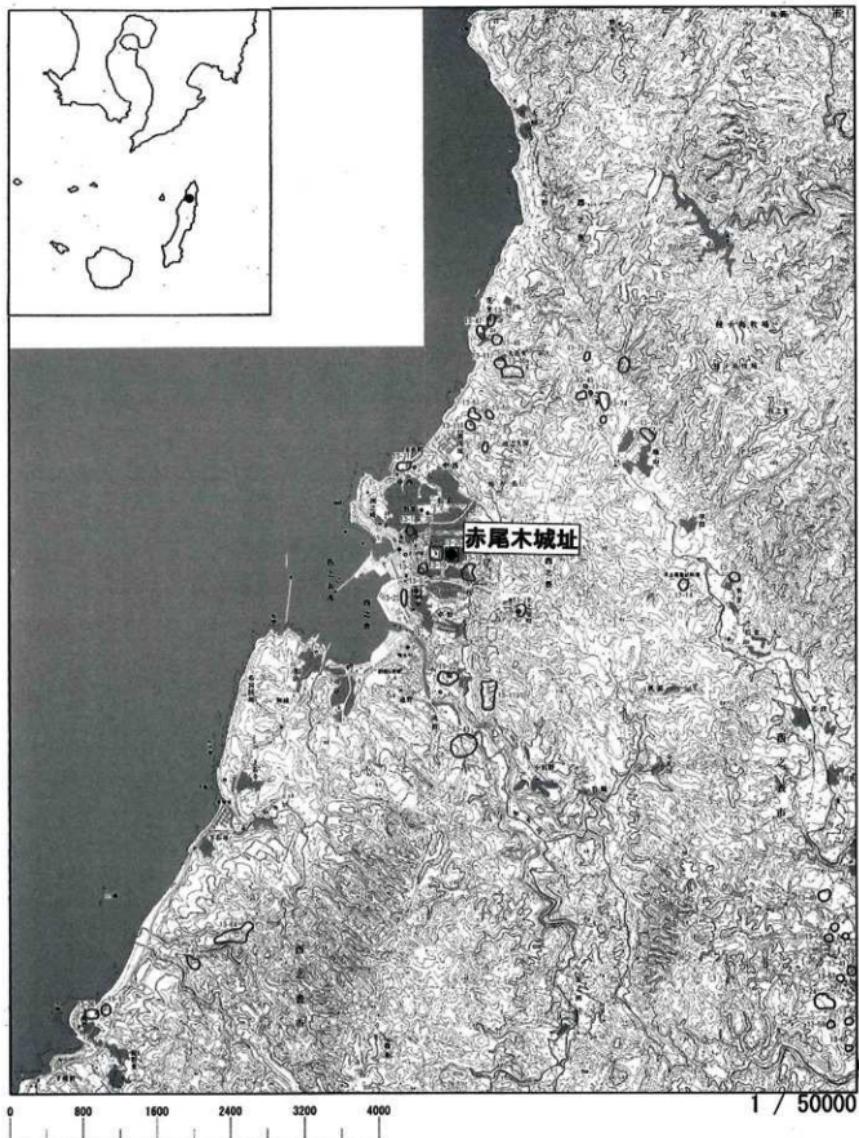
33

出土遺物 (4)



# 赤尾木城址





第1図 赤尾木城址位置図

## 第Ⅰ章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

西之表市教育委員会は平成13年度より国・県の補助事業を受け市内遺跡詳細分布調査を実施しており、平成14年度は赤尾木城址と太田遺跡の調査を行った。赤尾木城址は現在榕城小学校となつており、平成15・16年度に校舎の立替工事が予定されており、また不明とされている種子島の城館址を探る目的も含め、工事対象地を中心に詳細分布調査を行うこととなった。発掘調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成14年8月19日から8月23日まで行った。報告書作成に伴う整理作業は平成15年度に行った。

### 第2節 調査の組織

#### (発掘調査)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会	教育長	有島 正之
発掘調査責任者	西之表市教育委員会	文化課 課長	鮫島 市憲
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会	文化課 課長補佐	奥村 学
発掘調査担当	西之表市教育委員会	文化課 主事	沖田純一郎
発掘調査作業員	安藤美津子・桑原とも子・下闇 恵・中村桂子		

#### (整理作業)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会	教育長	有島 正之
発掘調査責任者	西之表市教育委員会	社会教育課 課長	阿世知猛雄
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会	" 総括課長補佐	奥村 学
整理作業担当	西之表市教育委員会	" 主事	沖田純一郎

### 第3節 調査の経過

赤尾木城址は現在榕城小学校となっているが、平成15年度より校舎建替えのための工事が計画されており、そのため調査は校舎建設工事対象地を主に行なった。

以下調査の経過については日誌抄をもってかえる。

8月19日	月	トレンチ3ヵ所設置。重機による表土剥ぎ後、1・2・3トレンチ掘り下げ開始。トレンチ配置図作成。1・2トレンチ調査終了。
20日	火	4・5・6トレンチ設置、重機による表土剥ぎ後、掘り下げ作業。3トレンチ調査終了。1～3トレンチ重機にて埋め戻し。市文化財保護審議委員大石氏来跡。尾形之善氏・鮫島安豊氏来跡。
21日	水	4・5・6トレンチ掘り下げ。4トレンチより旧パン工場基礎部分を確認する。4トレンチ掘り下げ終了。
22日	木	7トレンチ設置。5～7トレンチ掘り下げ。トレンチ配置図作成。6トレンチ掘り下げ終了。西之表市建設課職員3名・南種子町教育委員会社会教育課石堂氏来跡。
23日	金	5・7トレンチ掘り下げ、清掃。5トレンチ土層断面図作成。写真撮影。4～7トレンチ重機にて埋め戻し。調査終了。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

種子島は本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた、東南約40kmの海上にあり、南北52km、東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高でも282.3mしかない低平な細長い島で、地形は丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地からなり、西方に位置する屋久島とは対照的である。また、西海岸部には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は断崖に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町と1市2町からなる。

赤尾木城址は西之表市の文化財に指定されており、西之表市街地に位置する。現在は種子島で最も児童数の多い榕城小学校となっており、その西側には榕城中学校がある。この、榕城中学校も内城と呼ばれた城館址であり、このあたりが種子島氏の居城で、その城下には武士の集住地と役所からなる籠が形成された。

種子島氏は鎌倉時代のはじめ、種子島家の祖先平信基が南海十二島の支配を命ぜられ来島して以来、藩政末までの約700年間にわたって種子島を支配した。しかし、初代信基から5代時基の間は種子島家の伝説時代で来島したという確実な史料はなく、6代時充から来島したといわれており本城に城を築いている。12代忠時は池田の黒山尻に築き、16代久時は野久尾に築いている。17代忠時のころ寛永20年(1643)からは島主は鹿児島に移任せよと島津氏の命があり、以後代々種子島は家臣に治めさせ、島主は時折帰島していた。

城と述べているのは、島主の館、すなわち屋敷があったところで天守閣や城郭があったものとは考えられておらず、地形を利用し砦を築いた山城であったと思われる。

### 第2節 赤尾木城址（榕城小学校）の経緯について

武家社会南限の地といわれる種子島であるが、赤尾木城址も含めて、種子島の歴代島主の城館についての文献や資料は非常に乏しい。城館址では、土壘・石（珊瑚）垣などが見られるが遺物等は採集されておらず、文献では懐中島記・種子島家譜に述べられている程度である。

懐中島記は元禄2年（1689年）上妻七兵衛隆直によって書かれたもので、その中に種子島氏歴代の居城の変遷が記されている。

島主住所号赤尾木宅地之事

信基六代時充 本城 十二代忠時 池田黒山尻 十三代恵時 屋久田

十四代 時堯 本源寺後内城 十六代久時 野久尾後号石峯 慶長十四年(1609)移内城

十七代忠時 寛永元年(1624)家内城上屋地至千令

このように懐中島記によると、17代忠時が寛永元年に内城（今の榕城中学校）から上屋地に城を移したことが書かれている。

種子島家譜には、元和九年(1623)十二月内城より上ノ城に移る・・とある。このように文献から17代忠時が上ノ城（赤尾木）に城館を移したことがわかる。

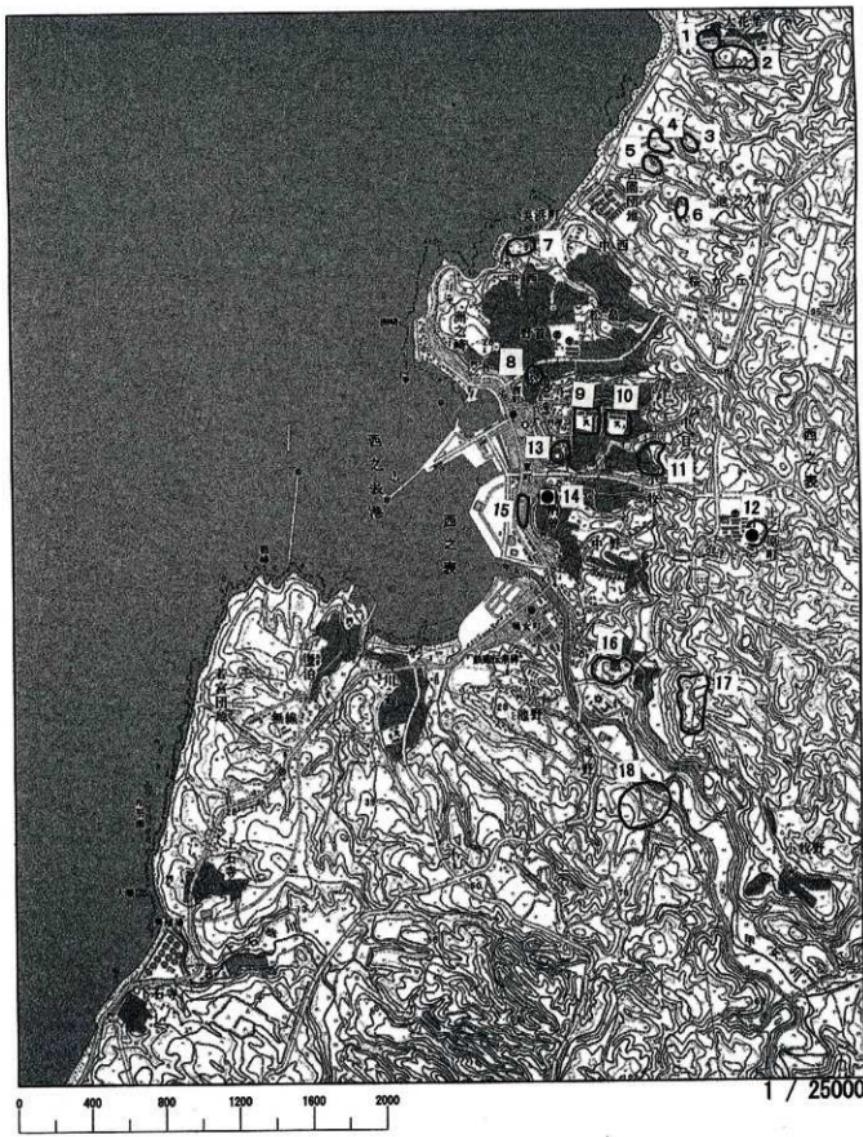
上屋地・上ノ城と記されているのは赤尾木城のことであるが、赤尾木と呼ばれるようになった由来は、江戸時代の初め頃、現在の榕城小学校の校舎あたりに大きな「あこうの木」が幾筋もの氣根を蛇のように幹に巻きつけグロテスクな格好で茂っていた。島主の館はその近くにあったため、いつしか島主館を赤尾木城と呼ぶようになった。と旧家の一つ田上家の系図に記録がある。それがいつしか西之表の麓一帯を「赤尾木」と呼ぶようになったらしい。「赤尾木」はアコーの木のことである。

このように赤尾木城址は小学校となり、現在に至るが過去に数回校舎や施設を建築するなどしておあり、下表は榕城小学校の沿革も含め、それらをまとめたものである。

年号	西暦	主な開発等
安政4年	(1857)	学校を内城に創建し、講談役をして生徒に教授する。
明治5年	(1872)	変則小学校を旧城館跡に設け、漢学・数学・洋楽を教える。
明治6年	(1873)	学校を県に統括。西之表にあるものを本島の母校として第73郷校、野間・茎永に分校を置く。
明治9年	(1876)	1月 女学校を本源寺跡に開く。 9月4日 第73郷校内に正則小学校を置く。(学級教授学校の始め) 現在の榕城小学校開校(この日をもって創立記念日とする) 「正則小学校が置かれたことによって、名実ともに学校として発足したことになる」
明治11年	(1878)	5月 郷校の正則科を分離して榕城小学校と称す。 5月 女学校を西之表榕城小学校に合併する。
明治17年	(1884)	西町慈遠寺跡の春日小学校を合併する。
明治20年	(1887)	榕城小学校を西之表高等尋常小学校と改称する。
明治25年	(1892)	榕城尋常高等小学校と改称する。
明治29年	(1896)	学校改築行われる。経費6,000円
明治34年	(1901)	榕城校より女子を分離して、女子榕城尋常高等小学校を置く。 (現市役所の地)
明治38年	(1905)	女子榕城小学校を本源寺東に分離す。
大正3年	(1914)	女子榕城尋常高等小学校、上西尋常小学校、下西尋常小学校を廃止し、榕城尋常高等小学校に合併する。
大正11年	(1922)	講堂164坪新築する。
昭和6年	(1931)	女子部校舎を男子部合併。前校舎を新築し、男女全児童を収容する。
昭和19年	(1944)	空襲激しく、3年生以上の児童を大口へ疎開させる。
昭和22年	(1947)	6・3・3制施行され、高等科を廃止し榕城中学校へ移す。
昭和23年	(1948)	給食室を作り、給食実施する。

昭和26年	(1951)	講堂危険となり鉄筋支柱を入れ復旧する。東校舎を改築する。
昭和28年	(1953)	発電設備をなす。
昭和29年	(1954)	東校舎を解体し、鉄筋コンクリート2階建て、240坪を建築する。
昭和30年	(1955)	西南校舎を改築する。（工費250万円）
昭和31年	(1956)	鉄筋コンクリート2階建て、160坪を増築する。
昭和34年	(1959)	鉄筋2階建て、133坪を増築する。（工費678万4千円）完全給食実施、給食室33坪・パン工場18坪（工費設備費270万円）
昭和35年	(1960)	パン工場焼失（損害120万円） パン工場コンクリート建21坪新築（工場設備費1,170万円）
昭和36年	(1961)	鉄筋2階建て101坪（4教室）増築（不正常授業解消のための増築）
昭和37年	(1962)	鉄筋2階建て191坪(6教室)増築（不正常授業解消のための増築）
昭和39年	(1964)	鉄筋2階建て186坪(工費1,080万円)「校長室・事務室・放送室・3教室」
昭和40年	(1965)	鉄筋2階建て124坪増築(工費8,875千円)「職員室・3教室・階段」
昭和41年	(1966)	新講堂落成250坪（1,800万円）
昭和43年	(1968)	校舎東側にPTAの寄金で鉄筋ブロック造り補助プール完成（903,450円）
昭和44年	(1969)	本校自営製パン工場を営業閉鎖し廃止した。
昭和52年	(1977)	特別教室（理科・音楽・家庭・視聴覚・児童会）体育倉庫、便所等建設 880m <sup>2</sup>
昭和54年	(1979)	特別教室竣工(23,709千円)
昭和58年	(1983)	大規模改修工事完成

- 参考文献 タネガシマ風物誌 鉄砲伝来の島 下野敏見著(1969年)  
 西之表市百年史 西之表市編纂委員会(1971年)  
 希望 榎城小学校創立百周年記念誌 榎城小学校創立百周年記念実行委員会  
 記念誌部(1977年)  
 西之表市年表 西之表市役所(1991年)



第2図 赤尾木城址と周辺遺跡図

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物	文献等
1	一ノ鳥居	西之表市上西池之窪	砂丘	縄文後期	土器片	H4年 サンオーサンリノート分布調査
2	大花里	西之表市上西大花里	砂丘	縄文後期	土器片	S52年確認調査 「南種子郷土誌」
3	池之久保Ⅰ	西之表市上西池之久保	台地	縄文前期	土器片	
4	池之久保Ⅱ	西之表市上西池之久保	台地	縄文前期	土器片	
5	池ノ窪	西之表市上西池之久保	砂丘	縄文後期	土器片	H4年 サンオーサンリノート分布調査
6	松原	西之表市榕城美浜町	砂丘	縄文・中世(室町)	土器片	H4年 サンオーサンリノート分布調査
7	古城跡	西之表市榕城美浜町	丘陵	歴史		県埋文報告書(43)
8	本城	西之表市榕城松島	台地	縄文前期・後期・晩期・歴史	土器片・石器類	S34-35年発掘調査
9	内城跡	西之表市榕城中目	丘陵	歴史		県埋文報告書(43)
10	赤尾木城跡	西之表市榕城中目	丘陵	歴史		県埋文報告書(43)市指定文化財 H14年詳細分布調査
11	新城跡	西之表市榕城中目	丘陵	歴史		県埋文報告書(43)
12	農林	西之表市榕城上之原	台地	縄文早期・古代		市埋文報告書(6)
13	坂ノ上城跡	西之表市榕城中目	丘陵	歴史		県埋文報告書(43)H6・7・9年詳細分布調査

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物	文献等
14	納曾	西之表市榕城納曾	台地	繩文後期	土器片・石器類	鹿児島考古第9号・納曾遺跡概報・鹿児島考古第12号・S50年発掘調査
15	黒山尻	西之表市榕城池田	丘陵	歴史		県埋文報告書(43)
16	城	西之表市榕城城内	丘陵	歴史		県埋文報告書(43)
17	古城跡	西之表市榕城城内	丘陵	歴史		県埋文報告書(43)
18	屋久田城跡	西之表市下西池野	丘陵	歴史		県埋文報告書(43)

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 調査方法

調査は平成14年8月19日から8月23日まで実施した。トレンチは校舎や講堂周辺に7ヶ所設置して調査を行った。掘り下げは表土を重機で除去した後、人力で行いトレンチの大きさは土層確認等のため適宜変更するなどした。調査面積は約39m<sup>2</sup>になった。

### 第2節 層位

土層は場所によって、一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。

- I層 表土
- II層 淡黒褐色土
- III層 黒褐色土
- IV層 茶褐色土
- V層 黒褐色土
- VI層 茶褐色ローム
- VII層 明橙色火山灰土（西之表テフラに相当・約7万5千年前）
- VIII層 岩盤

### 第3節 トレンチ調査状況

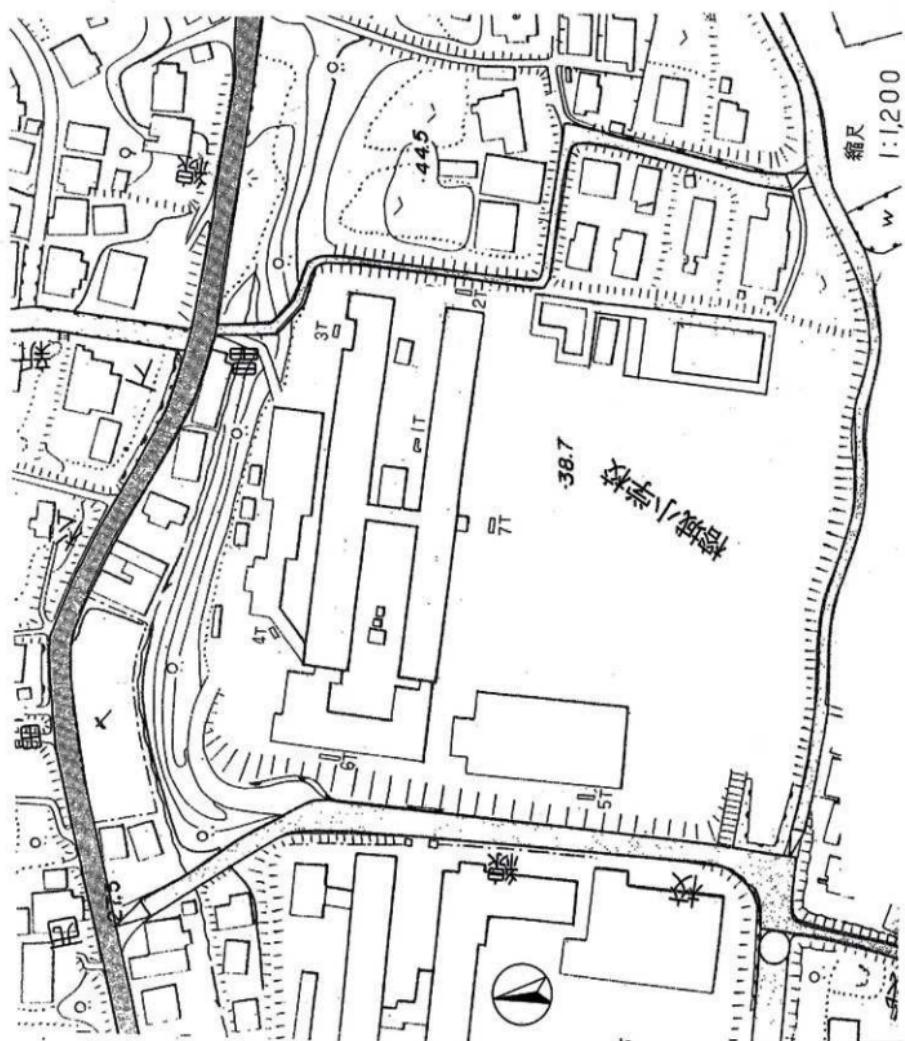
各トレンチの調査状況は下記のとおりである。

第2表 トレンチ調査状況

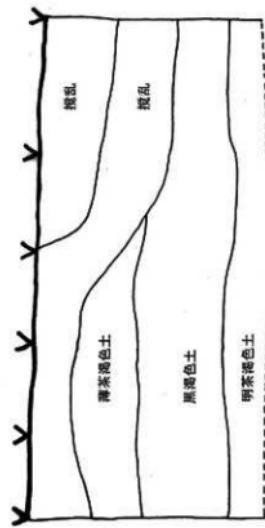
トレンチ番号	大きさ (m)	深さ (cm)	最下層	遺物	遺構	備考
1	3.5×2.2	60	岩盤	×	×	I層～V層削平
2	1.1×4.5	70	岩盤	×	×	I層～VI層削平
3	1.5×3.3	90	岩盤	×	×	I層～VI層削平
4	1.5×2.5	140	岩盤	×	×	搅乱を受ける
5	1.3×4.7	115	明茶褐色土	×	×	
6	0.9×5.3	30	明橙色火山灰土	×	×	I層～VI層削平
7	1.4×4.5	65	明橙色火山灰土	×	×	I層～VI層削平

### 第4節 遺構・遺物

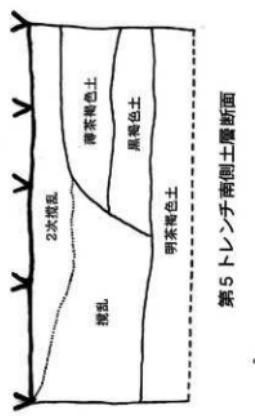
7ヶ所トレンチを設置して調査を行ったが、全てのトレンチにおいて赤尾木城址に関する遺構・遺物等は出土しなかった。



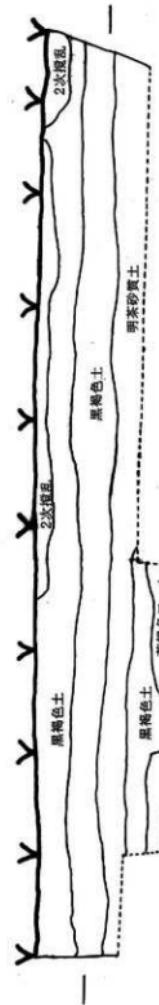
第3図 トレンチ配置図



第5トレンチ北側土層断面



第5トレンチ南側土層断面



第5トレンチ西側土層断面



第4図 土層断面図

## 第Ⅳ章 調査のまとめ

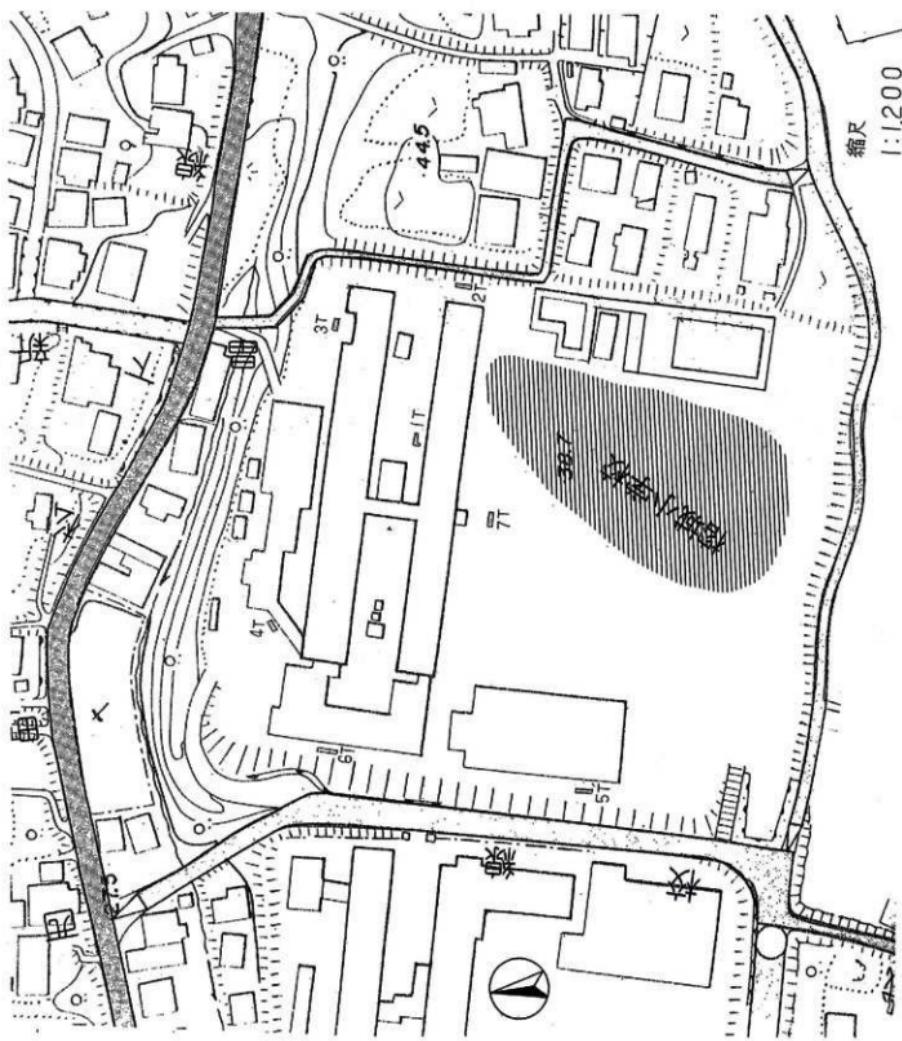
### 第1節 遺跡の範囲等

調査を行った結果、現在の校舎周辺部においては開発等により、かなり削平が行われていることが判明した。校舎及び施設周辺から遺物・遺構が出土しなかったため赤尾木城址の痕跡が残存している場所は校庭の東側部分の可能性が強まつた。

### 第2節 調査のまとめ

今回の調査で、赤尾木城址の遺物・遺構は発見されず、校舎や施設の周辺は予想以上に削平が行なわれていたことが判明した。赤尾木城を含め種子島氏歴代の居城は地形を利用した山城であると考えられているが、そこには島主の屋敷や様々な施設等があったと思われる。

調査結果から、現在の校舎などが建っている北側部分には、これらの痕跡は既に滅失していることが判明し、残存している可能性があるのが校庭の東側であると思われ、今後機会があれば調査を行い明らかにしていく必要がある。



第5図 遺構等残存予測地

## 写真図版





前校舎・講堂



正門



旧給食室

調査地現況

図版 2



前校舎・後校舎



トイレ・飼育小屋



後校舎・図書室

調査地現況

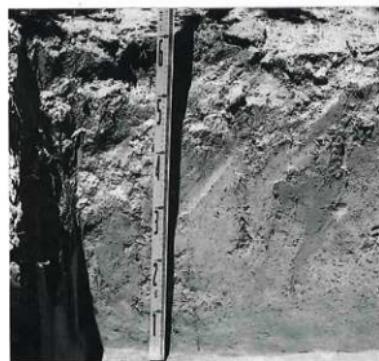
図版 3



1 トレンチ



1 トレンチ



1 トレンチ



2 トレンチ



2 トレンチ



2 トレンチ

調査状況 (1)

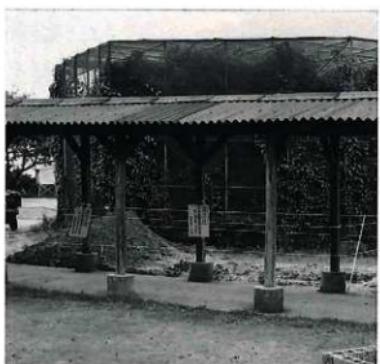
図版4



3 レンチ



3 レンチ



4 レンチ



4 レンチ



4 レンチ



5 レンチ

調査状況（2）

図版5



5トレンチ



5トレンチ



5トレンチ



5トレンチ



6トレンチ



6トレンチ

調査状況（3）

図版 6



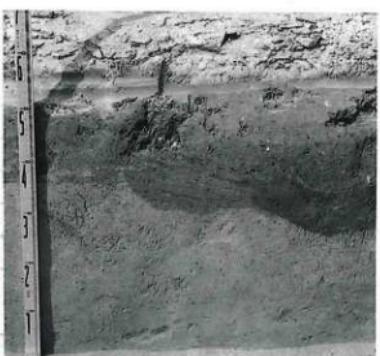
6 トレンチ



7 トレンチ



7 トレンチ



7 トレンチ



7 トレンチ

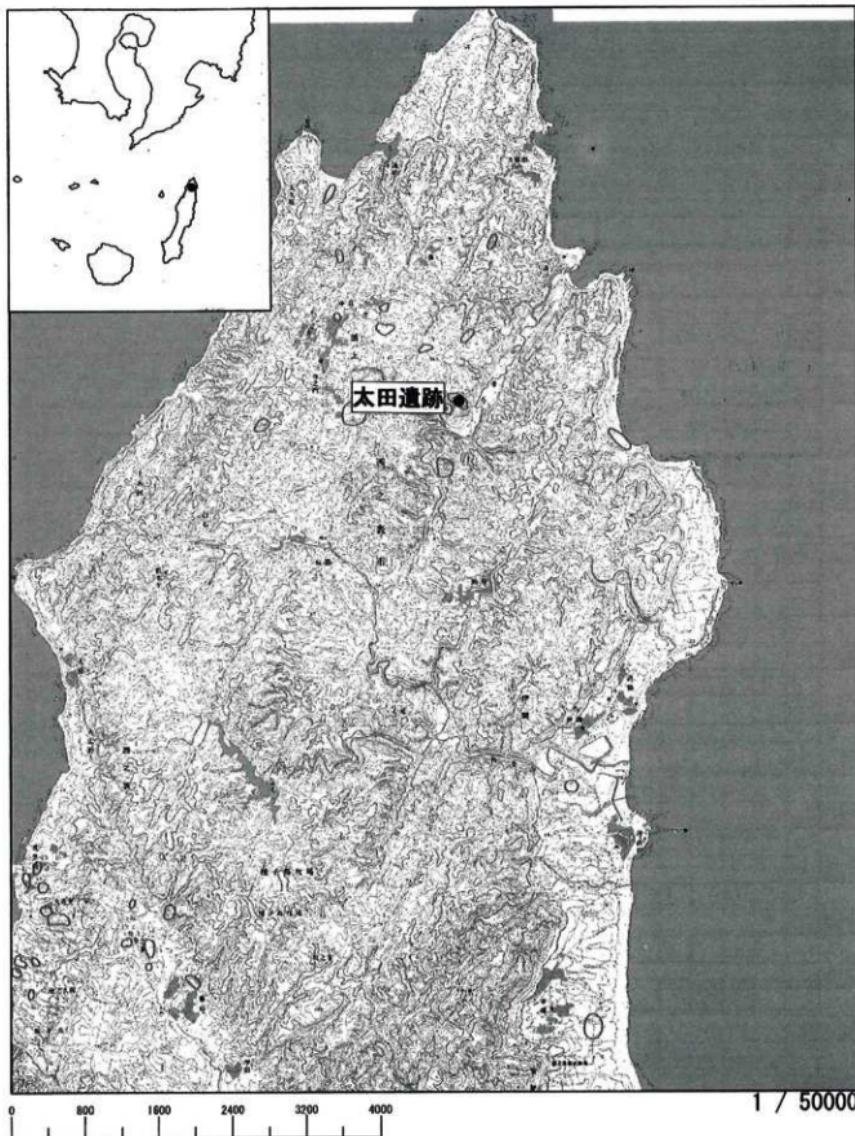


7 トレンチ

調査状況 (4)

# **太田遺跡**





第1図 太田遺跡位置図

## 第Ⅰ章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

西之表市教育委員会は平成13年度より国・県の補助事業を受け市内遺跡詳細分布調査を実施しており、平成14年度は赤尾木城址と太田遺跡の調査を行った。太田遺跡は古代の種子島における様相の情報や、製鉄に関する資料を得ることを目的に、西之表市教育委員会が調査主体となり、平成14年10月16日から10月31日まで行った。報告書作成に伴う整理作業は平成15年度に行った。

### 第2節 調査の組織

#### (発掘調査)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会		
発掘調査責任者	西之表市教育委員会	教育長	有島 正之
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会	文化課 課長	鮫島 市憲
	"	文化課 課長補佐	奥村 学
発掘調査担当	西之表市教育委員会	文化課 主事	沖田純一郎
発掘調査作業員	荒河恵美子・大河ソヨ子・大河八津恵・砂坂マサ子・中村フミ子 安藤美津子・桑原とも子・中村桂子		
発掘調査協力者	長野 勝		

#### (整理作業)

発掘調査主体者	西之表市教育委員会		
発掘調査責任者	西之表市教育委員会	教育長	有島 正之
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会	社会教育課 課長	阿世知猛雄
	西之表市教育委員会	" 総括課長補佐	奥村 学
整理作業担当	西之表市教育委員会	" 主事	沖田純一郎
整理作業指導	鹿児島県教育庁文化財課	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
整理作業員	荒井美佳子		

### 第3節 調査の経過

調査対象地内に4ヶ所トレンチを設置し、人力で掘り下げながら調査を行った。トレンチの大きさは2×5mを基準にし、土層確認のため一部拡張するなどした。以下、調査の経過については日誌抄をもってかえる。

10月 16日	水	1・2トレンチ設置。掘り下げ開始。遺物出土する。
17日	木	1・2トレンチ掘り下げ、土師器片出土する。1トレンチ半裁して掘り下げ。3トレンチ設置。鮫島文化課長・長野勝氏来跡、調査地草払いを行う。
18日	金	1トレンチ掘り下げ、アカホヤ火山灰層確認、清掃、写真撮影。3トレンチ半裁して掘り下げる、青磁片等出土。4トレンチ設置。1~4トレンチ配置図作成。長野勝氏来跡。
21日	月	2トレンチ清掃、写真撮影。3・4トレンチ掘り下げ、青磁片等出土。
22日	火	3・4トレンチ掘り下げ、遺物出土する。 長野勝氏、熊毛支庁土木課橋木氏来跡。
23日	水	1・3・4トレンチ掘り下げ、3トレンチ掘り下げ。4トレンチ平板・レベル遺物取上げ。長野勝氏来跡。
24日	木	1トレンチ掘り下げ、清掃、写真撮影。2トレンチ掘り下げ、土器片出土する。3トレンチ掘り下げ。
25日	金	1・2トレンチ、平板・レベル遺物取り上げ。4トレンチ土層断面図作成。3トレンチ拡張して掘り下げ。各トレンチにシートをかける。長野勝氏、市農水土木課職員2名、奥村文化課長補佐来跡。
30日	水	1・2トレンチ土層断面図作成、2・3トレンチ掘り下げ、3トレンチより青磁片等出土する。長野勝氏来跡。
31日	木	3トレンチ、平板・レベル遺物取り上げ、土層断面図作成。道具等後片付け、本日にて調査終了。長野勝氏、鮫島文化課長、奥村文化課長補佐来跡。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

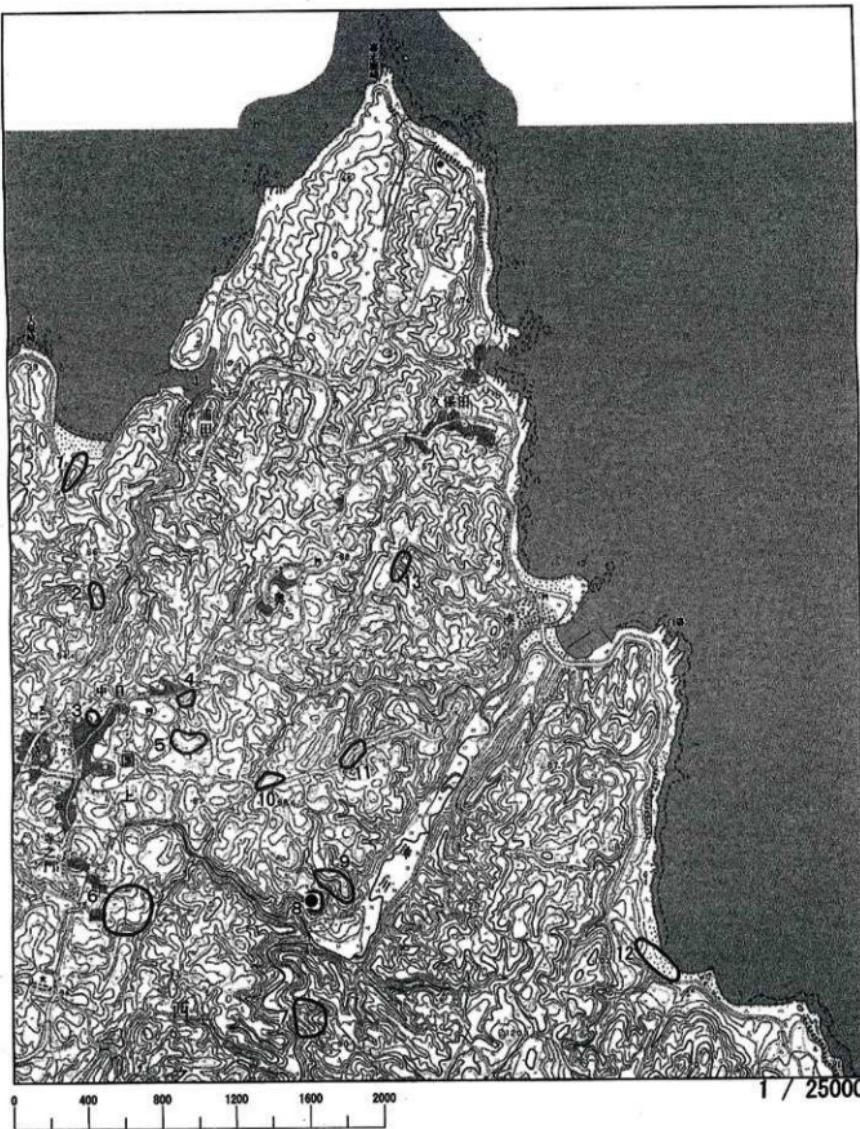
### 第1節 遺跡の位置と環境

種子島は本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた、東南約40kmの海上にあり、南北52km、東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高でも282.3mしかない低平な細長い島で、地形は丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地からなり、西方に位置する屋久島とは対照的である。また、西海岸部には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は断崖に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町と1市2町からなる。

太田遺跡は種子島の北側、西之表市国上寺之門に位置する。太田遺跡周辺はその地名「寺之門」から、たびたび国分寺（島分寺）との関係が指摘されている。寺之門の他に、花堂・大内屋敷などの地名が残っており、国府がおかれた地の候補にあがっているが、確証となる遺物・遺構などは発見されていない。また、太田遺跡周辺では製鉄に関する遺物が多数採集され、製鉄に関する伝承も残っており、種子島で解明されていない古代・中世以降の歴史を考察する上で重要な地である。

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物	文献等
1	小浜貝塚	国上 中目	砂丘	縄文前期・古墳・中世	土器片	H8年詳細分布調査
2	大中峯	国上 中目	台地	旧石器	細石核・細石刃	
3	稲村	国上 中目	低地	縄文	土器片	H10年確認調査
4	稲庭	国上 中目	低地	古墳		H10年確認調査
5	平庭A	国上 中目	台地	古墳		H10年確認調査
6	寺之門	国上 寺之門	低地	縄文早期・後期・中世	土器片	H9年発掘調査
7	太田I	国上 寺之門	台地	縄文・歴史		
8	太田II	国上 寺之門	台地	歴史		
9	太田	国上 寺之門	台地	古墳・奈良・中世・歴史	土器片・須恵器・土師器・青磁	H14年詳細分布調査
10	平庭B	国上 中目	台地	縄文前期	土器片	H10年確認調査
11	高峯	国上 中目	台地	縄文		H10年確認調査
12	小浜	伊闐 柳原	砂丘	古墳	土器片・人骨	H9年発掘調査
13	湊	国上 湊	台地	旧石器・縄文	細石核・土器片	



第2図 太田遺跡と周辺遺跡図

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 調査方法

調査は平成14年10月16日から10月31日まで実施した。トレンチは調査対象地内の畠地に4ヶ所設置して調査を行った。掘り下げは、人力で行いトレンチの大きさは2m×5mを基準にし、一部土層確認等のため適宜変更するなどした。調査面積は約73m<sup>2</sup>になった。

### 第2節 層位

土層は場所によって、一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。

- I層 表土
- II層 灰褐色土
- III層 暗黄褐色土
- IV層 茶褐色土
- V層 黒褐色土
- VI層 黄橙色火山灰土（アカホヤ火山灰に相当、約6,400年前）
- VII層 ベージュ色ローム土
- VIII層 黒褐色粘質土
- IX層 暗茶褐色土
- X層 明茶褐色土
- XI層 岩盤

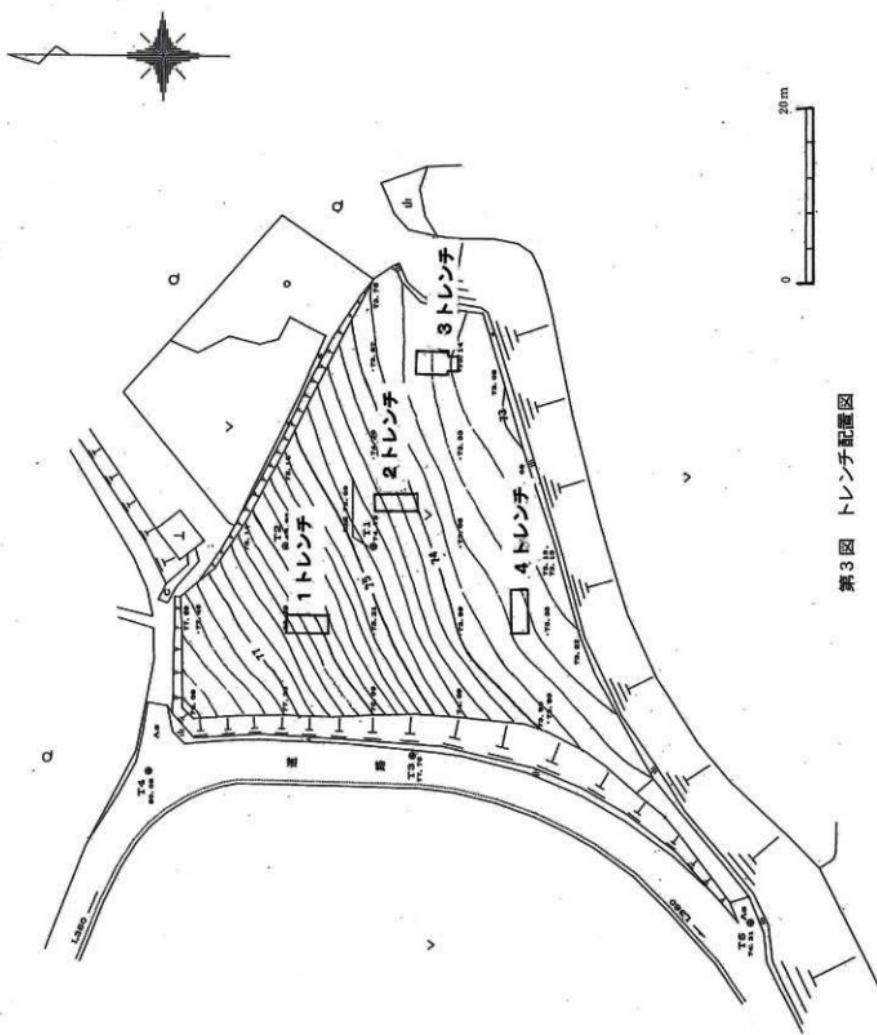
### 第3節 トレンチ調査状況

各トレンチの調査状況は下記のとおりである。

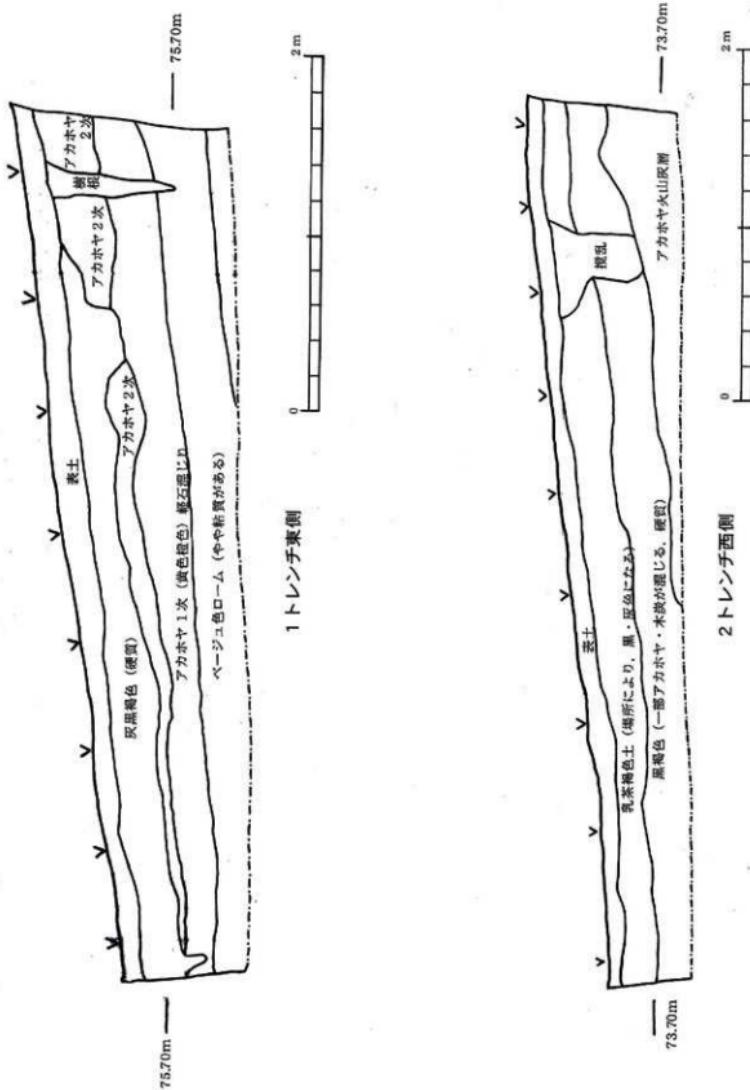
第2表 トレンチ調査状況

トレンチ番号	大きさ (m)	深さ (cm)	最下層	遺物	遺構	備考
1	2×5	130	黒褐色粘質土	○	○	
2	2×5	90	黄橙色火山灰土	○	○	
3	(3.2×1.8)+(5.3×7)	70	黄橙色火山灰土	○	○	
4	2×5	50	岩盤	○	×	

第3図 トレーンチ配置図



第4図 土壠断面図 (1)

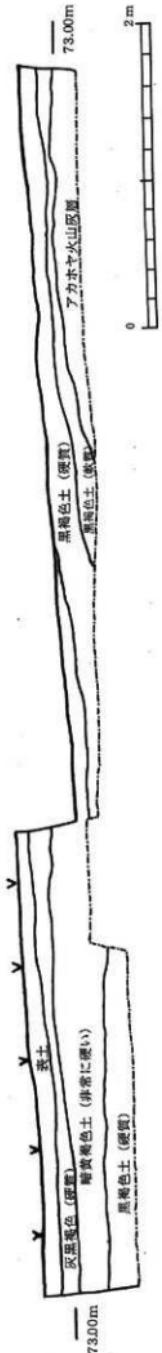


第5図 土壌断面図 (2)

4 トレンチ北側



3 トレンチ西側ベルト



#### 第4節 遺構

1・2・3トレーナーより水田の盤と思われる層を確認した。非常に固く締まっており土層は暗黄褐色を呈し、千枚田のような水田であったものと思われる。時期は不詳である。

#### 第5節 遺物

調査の結果、土器片・須恵器・土師器・青磁・白磁・羽口等パンケース4箱分が出土した。以下、トレーナーごとに出土した遺物を述べてみる。

##### 1 トレーナー

1～6は表層から出土したものである。1～4は土器片で1・2は外面に黒色研磨が見られる。5・6は須恵器で外面・内面ともに叩き目が見られる。7～10は土師器であり、時期は9世紀～10世紀末と思われる。11は陶磁器で15世紀のものと思われる。

##### 2 トレーナー

土器片、須恵器、土師器、青磁が出土する。12～16は土器片である。12は口縁部が三角形で肥厚し、口縁部の肥厚部分だけに鋭いヘラ状の工具で文様を刻んでいる。13・14は無文の口縁部である。15・16は胴部である。これらは12と同じ型式に属すると思われる。

17・18は須恵器で17は8世紀後半、18は7世紀後半のものと思われる。19～28は土師器である。19は高台に二次加工として抉りが見られる。20～22も、19と同様高台に抉りを持つものと思われる。23は内面に貝殻腹縁部で刺突を施している。25は小片のため抉りは確認できなかった。24・26は内面にヘラ或いは櫛状の工具での、擦痕が見られる。土師器類の時期は全て9世紀から10世紀末のものと思われるが、25・28は表層より出土している。29は青磁で、16世紀の竜泉窯系であり、内面にスタンプ印が見られる。30はタイ産の黒褐釉壺と思われ、表層より出土した。

##### 3 トレーナー

土器片、須恵器、土師器、青磁、白磁、羽口が出土した。31～37は土器片である。31～34は口縁部で、刷毛目の調整が施されている。36は内面に黒色研磨が施されている。

38・39は須恵器で8世紀後半のものである。40～49は土師器である。40は須恵器の模倣をしたもので、8世紀後半のものである。41～43・45は高台に二次加工として抉りを持つものとした。土師器の時期は40を除いて9世紀～10世紀末と思われる。50は青磁で、12世紀後半の竜泉窯の口縁部である。51は白磁碗で16世紀後半のものである。52～54は青磁である。52は合子の蓋で、時期は13世紀と思われる。53・54は16世紀のもので、53は雷文帯・蓮弁文、54は蓮弁文が見られる。56は羽口である。

##### 4 トレーナー

土器小片、須恵器、磨製石斧、滑石製で石鍋の一部と見られるもの、青磁等が出土したが、いず

れも表土もしくは暗茶褐色土層内の一剖乱を受けている層からの出土である。

57~59は土器片である。小片のためはっきりしないが、刷毛目調整痕が見られる。60は須恵器で8世紀後半と思われる。61~64は土師器である。61は高台に抉りを持つものである。土師器の時期は9世紀~10世紀末と思われる。65は青磁で16世紀のものと思われる。66はタイ産の黒褐釉壺と思われる。68は滑石製の石鍋の一部で、69は磨製石斧であり、石材はチャートと思われる。石鍋・石斧は表土からの出土であり、時期を特定することはできなかった。表層から最大長1.8cm・最大幅1cm・最大厚0.5cmの小片の陶磁器が出土した。小片のため図化できなかったが、この陶磁器はコバルトブルーの釉がかかっており、東南アジア産（ベトナム）のものと思われる。

遺物の年代が判断できたものを下記にまとめた。

第3表 主な出土物一覧

遺物名	時代	出土トレンチ
土器片	古墳時代以降	1・2・3・4T
須恵器	8世紀後半	2・3・4T
須恵器	9世紀後半	2T
土師器	8世紀後半	3T
土師器	9世紀末~10世紀末	1・2・3・4T
青磁	12世紀後半	3T
青磁	13世紀	3T
青磁・白磁	16世紀	2・3・4T

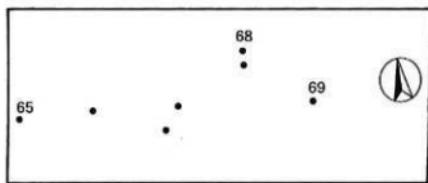
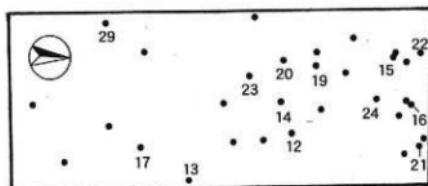
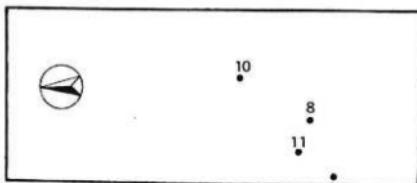
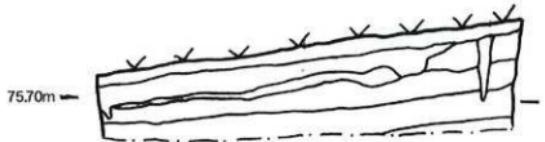
第4表 須恵器・土師器・陶磁器類計測表(1) (単位cm)

遺物番号	出土トレンチ	類	口径	器高	底径	脚基径	高台高
7	1	土師器				5.2	
8	1	土師器			8.0	7.0	0.8
9	1	土師器			6.2	5.8	0.9
11	1	陶磁器			4.4	2.8	1.3
17	2	須恵器			9.8	8.4	0.5
19	2	土師器			8.2	7.2	1.9
20	2	土師器			7.2	7.0	1.3
22	2	土師器			8.0	7.6	1.3
24	2	土師器			6.3		
25	2	土師器			4.5	4.2	0.9
26	2	土師器			7.0		
27	2	土師器			6.4		
28	2	土師器			5.0		

第5表 須恵器・土師器・陶磁器類計測表（2）（単位cm）

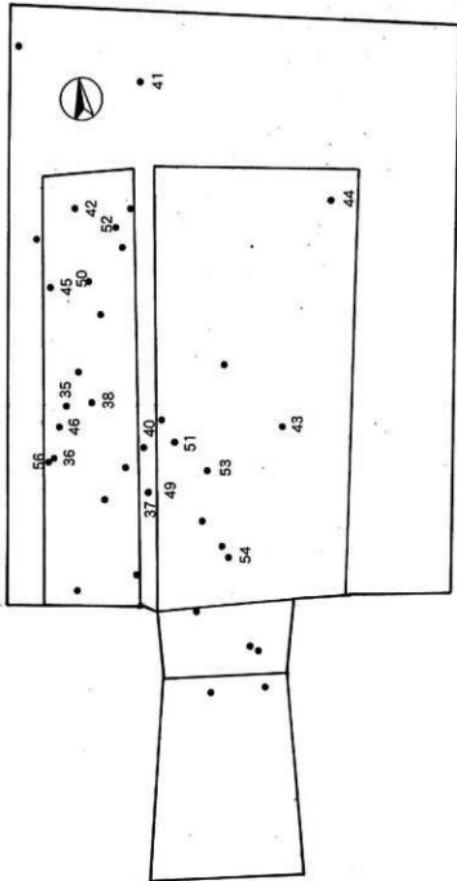
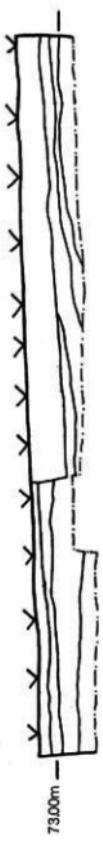
遺物番号	出土トレンチ	類	口径	器高	底径	脚基径	高台高
29	2	青磁			5.9	4.6	0.6
38	3	須恵器	13.2		8.6	5.4	0.5
39	3	須恵器			8.8		
40	3	土師器			10.8	8.6	0.4
41	3	土師器			7.4	6.6	2.9
42	3	土師器			7.4	4.0	2.5
43	3	土師器			8.0	7.4	1.3
44	3	土師器			4.7		
45	3	土師器			4.8	5.8	0.7
47	3	土師器			6.0	3.4	
48	3	土師器			4.7		
49	3	土師器			5.4	3.0	
50	3	青磁	14.5				
52	3	青磁(合子蓋)	5.6	3.2	3.5		
53	3	青磁	14.6				
54	3	青磁	13.6				
60	4	須恵器			8.2		
62	4	土師器					1.4
63	4	土師器			5.4	5.2	0.5
64	4	土師器			7.4	6.8	0.8
68	4	石鍋			10.8		

遺物の整理作業において、鹿児島県立埋蔵文化財センター 池畠耕一氏・中村和美氏、隼人町教育委員会 重久淳一氏、南種子町教育委員会 石堂和博氏から指導・助言を受けた。



4 トレンチ

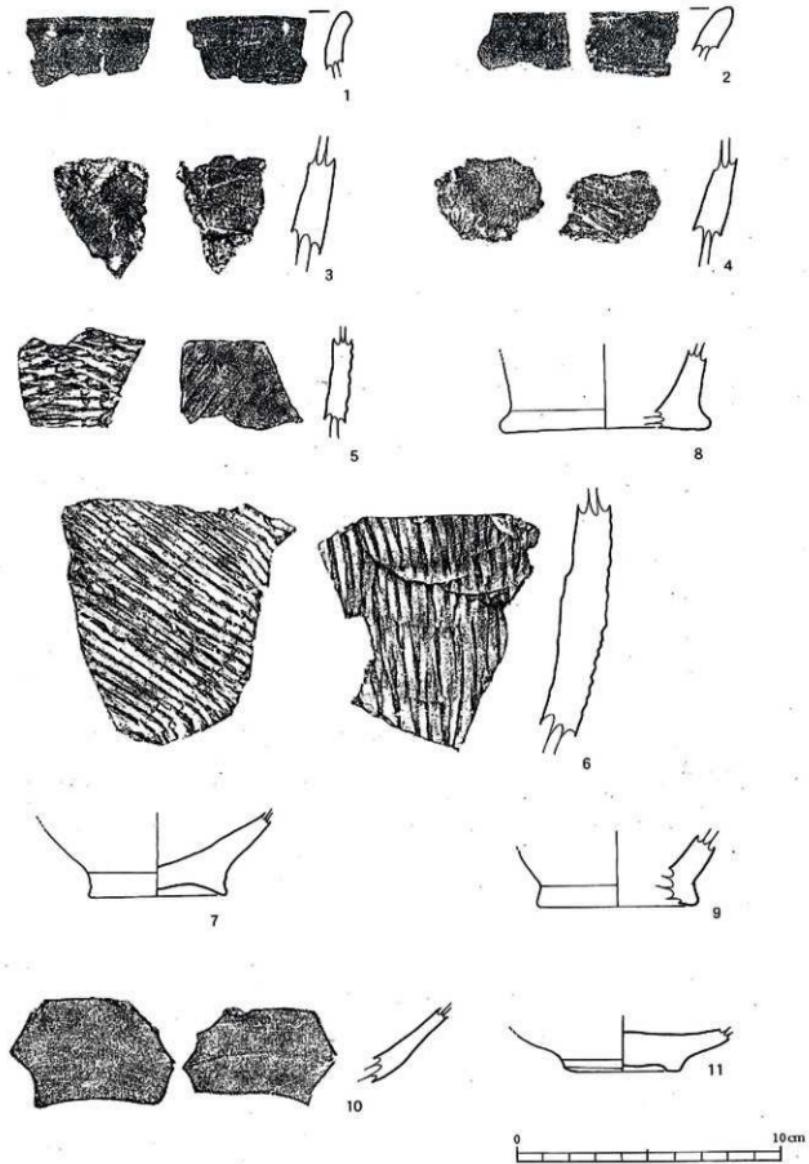
第6図 遺物出土状況（1）



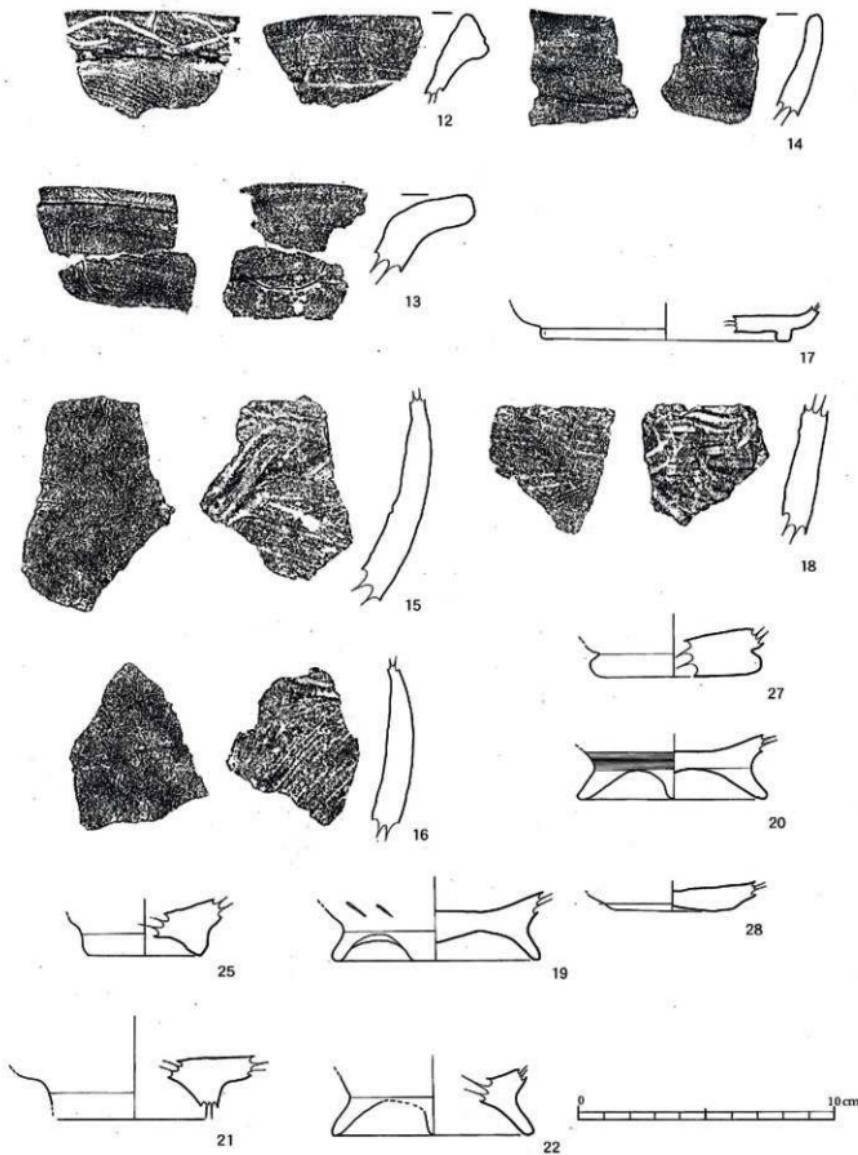
3 トレンチ



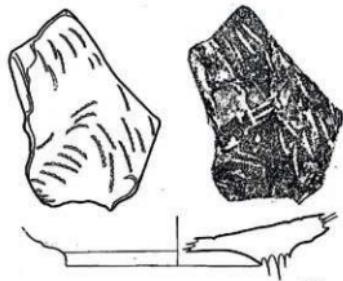
第7図 遺物出土状況(2)



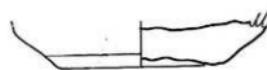
第8図 出土遺物(1)



第9図 出土遺物 (2)



23



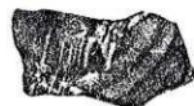
24



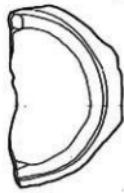
29



30



26



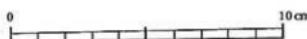
31



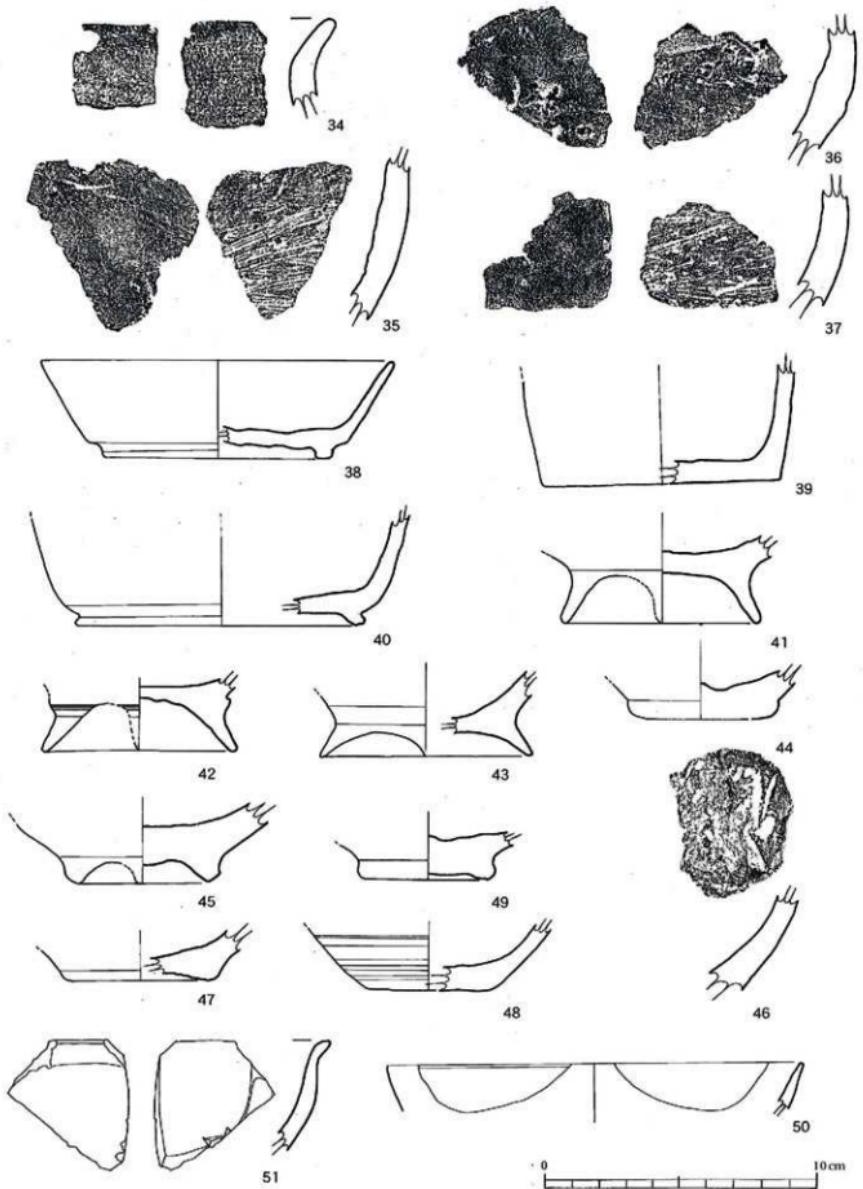
32



33



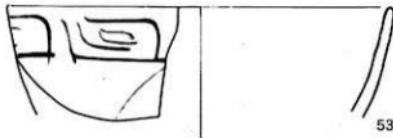
第10図 出土遺物 (3)



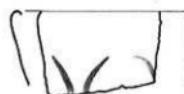
第11図 出土遺物 (4)



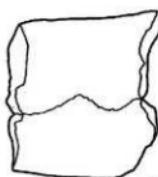
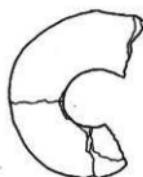
52



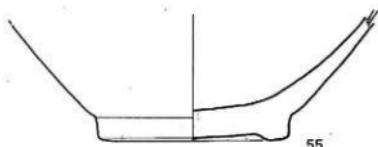
53



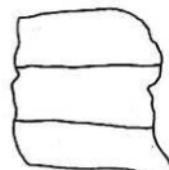
54



56



55



57



58



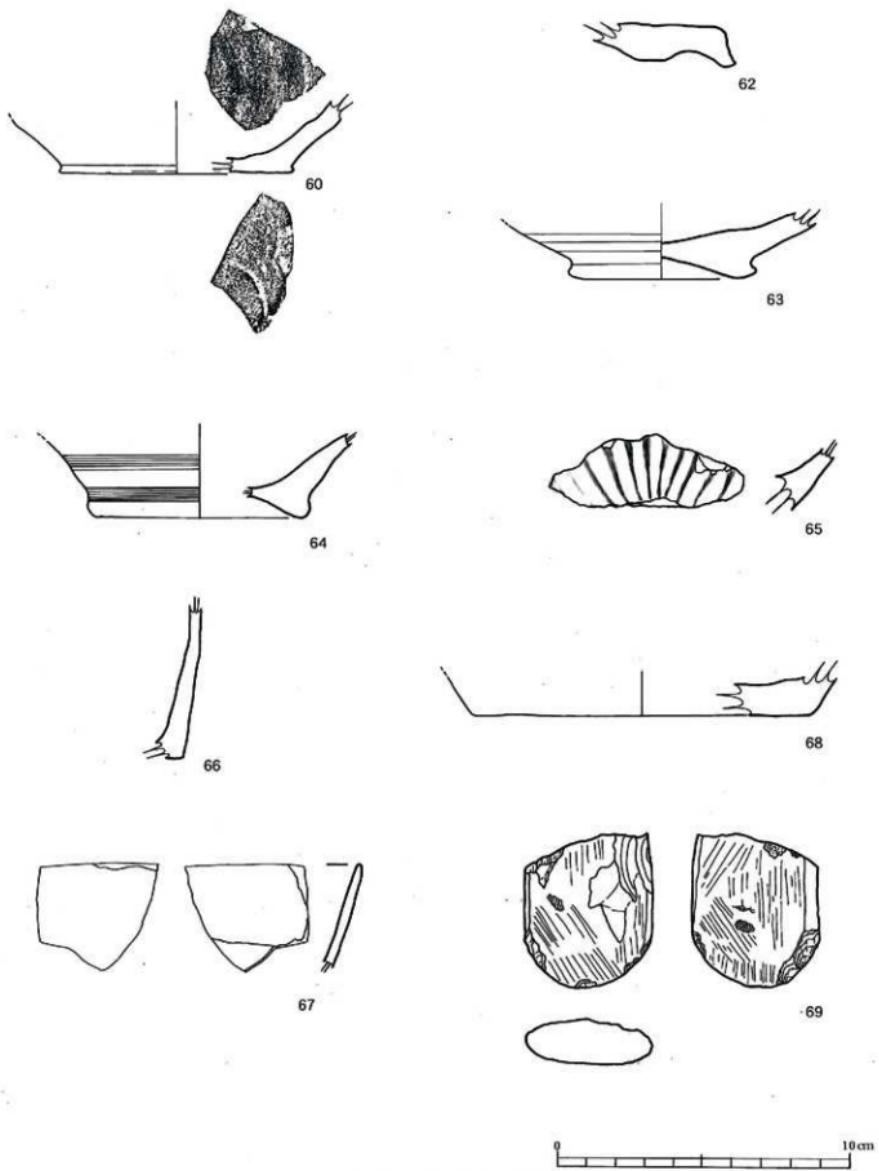
59



61



第12図 出土遺物 (5)



第13図 出土遺物 (6)

## 第Ⅳ章 調査のまとめ

### 第1節 遺跡の範囲等

調査を行った結果、一部土層が搅乱・削平を受けているものの、調査対象地一帯は遺物包含層が残存しているものと判断した。

### 第2節 調査のまとめ

今回の調査で特に注目されるのは、8世紀後半の須恵器が出土したことである。種子島では須恵器の出土報告例が少なく、貴重な発見となった。今後他の遺跡などと類例を比較しながら、なぜこの地から出土したのか・・など歴史的な背景も含めて検討していく必要があろう。土器片については、形態、施文等から西之表市住吉上能野貝塚出土土器を標準とする、上能野式土器と思われる。

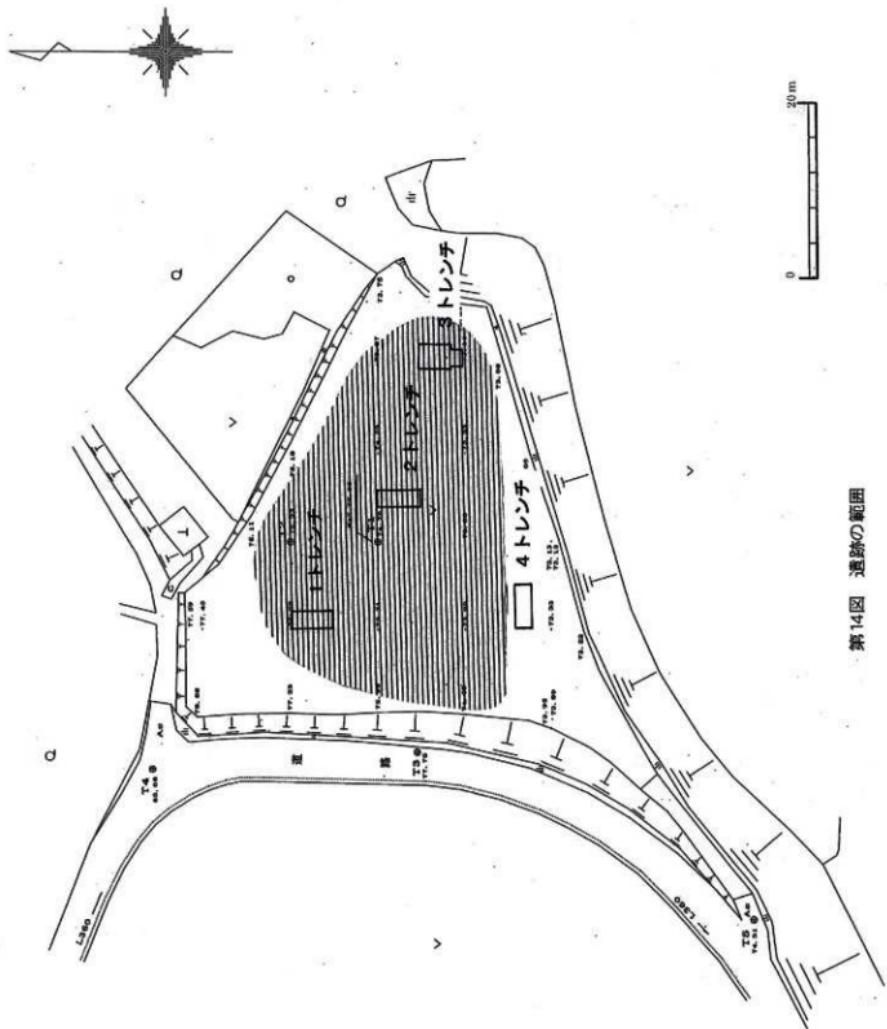
上能野式土器は極めて地域性の強い土器で現在までのところ、種子島・屋久島のみに出土している土器である。年代は、これまでの調査結果から古墳時代以降と考えられておりその下限は、不明とされているものである。本遺跡は種子島において上能野式土器が出土した最北端の遺跡となったので、今後年代等も含めて精査していく必要がある。

また、高台に抉りのある土師器が多数出土した。時期は9世紀から10世紀末のものと思われる。鹿児島県内ではこのような高台に抉りのあるタイプは出土しておらず、抉りのある高台が出現するのは青磁・白磁が主で15世紀と考えられており、本遺跡から出土したものは土師器であり、5世紀以上遡ることになる。推測ではあるが、中国大陆との関係がある遺物の可能性も含み、大陸の金属器・青銅器製品（仏具等）の模倣を試みたとも考えられる。今後、中国大陆の遺物も含め類例を比較しながら検討していきたい。

製鉄関連では羽口が出土した。使用目的（製鉄・製錬）や時期などを特定するには至らなかった。

東南アジア産の陶磁器も出土している。タイ・ベトナム産と思われる。出土した遺物からこの地に公的な施設、またはその関連施設があったとも推定できる。

これまで報告例が少なかった須恵器・土師器・青磁・白磁・東南アジア産陶磁器が出土したことにより、未解明な点が多くかった種子島の古墳時代以降の様相を探るうえで、大きな手がかりとなつた。



第14図 遺跡の範囲

## 付編

### 太田遺跡から出土した炭化材の年代

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

太田遺跡は、種子島北端に近い台地上に位置する。本遺跡では、これまでの発掘調査によって、種子島では出土例の少ない須恵器をはじめ、土器片、土師器、青磁など、古墳時代以降から16世紀に至る遺物が出土している。

今回の分析調査では、3トレンチの黒色土層内から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、その形成時期に関する情報を得る。

#### 1. 試料

試料は、3トレンチの黒色土層から出土した炭化材1点である。炭化材は、袋中に細片が多数入った状態であった。

#### 2. 方法

測定は、加速器質量分析法(AMS法)で行い、放射性炭素の半減期はLIBBYの5568年を使用した。なお、測定は、株式会社加速器分析研究所(IAA)が行った。

#### 3. 結果

放射性炭素年代測定結果を表1に示す。年代は、 $690 \pm 30\text{BP}$ (補正年代 $610 \pm 30\text{BP}$ )であった。なお、炭化材については、樹種同定も併せて実施した。その結果、コナラ属(アカガシ亜属またはウバメガシ)に同定された。

表1 放射性炭素年代測定結果

地区	層位・試料名	試料の質	測定年代	$\delta^{13}\text{C}$	補正年代	Code No.
3トレンチ	黒色土層内炭化物	炭化材(コナラ属)	$690 \pm 30\text{BP}$	$-30.04 \pm 0.76\%$	$610 \pm 30\text{BP}$	IAAA-30633

1) 年代測定は、加速器質量分析法(AMS法)による。  
2) 測定年代は1950年を基点とした年数で、補正年代は $\delta^{13}\text{C}$ の値を基に同位体効果による年代誤差を補正した値。  
3) 放射性炭素の半減期は5568年を使用した。

#### 4. 考察

炭化材が出土した3トレンチからは、炭化材の他に古墳時代以降の土器、8世紀後半の土師器および須恵器、9世紀末~10世紀中頃の土師器、12世紀後半の青磁、13世紀の青磁、16世紀の青磁および白磁が出土している。

炭化材の年代測定結果は、 $690\text{BP}$ (補正年代 $610\text{BP}$ )であった。補正年代について、INTCAL98(Stuiver et al., 1998)による暦年較正を行った。その結果、中央値でcal AD1325, 1350, 1390の歴年代から得られ、誤差を含めた年代範囲はcal AD1300~1400であった。この結果から、炭化材の年代として14世紀代が推定される。この年代は、出土遺物の年代範囲には収まっており、発掘調査所見とも矛盾しない。

今後、黒色土層から出土した遺物の情報も含めて年代に関する検討を行いたい。また、出土した土器類に煤などの炭化物の付着が認められるものがあれば、このような炭化物試料についても年代測定を行うことが望まれる。

引用文献

Stuiver, M. , Reimer, P. J. , Bard, E. , Beck, J. w. , Burr, G. S. , Hughen, K. A. , Kromer, B. , McCormac, G. , van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998)INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000 - 0 cal BP. Radiocarbon, 40, p. 1041 - 1083.

## **写真図版**

我的妻子



調査地遠景



トレンチ設置状況



1 トレンチ調査状況



1 トレンチ調査状況



1 トレンチ調査状況



1 トレンチ土層断面

調査状況（1）

図版 2



2 トレンチ調査状況



2 トレンチ調査状況



2 トレンチ遺物出土状況



2 トレンチ遺物出土状況



2 トレンチ遺物出土状況



2 トレンチ遺物出土状況

調査状況（2）



3 トレンチ調査状況



3 トレンチ調査状況



3 トレンチ遺物出土状況



3 トレンチ遺物出土状況



3 トレンチ遺物出土状況



3 トレンチ遺物出土状況

調査状況（3）

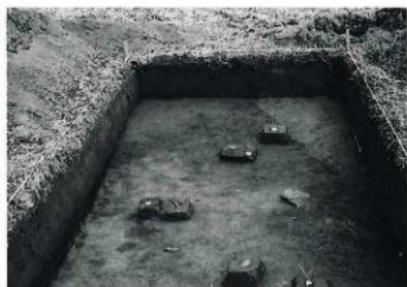
図版4



4 トレンチ調査状況



4 トレンチ遺物出土状況



4 トレンチ遺物出土状況



4 トレンチ遺物出土状況

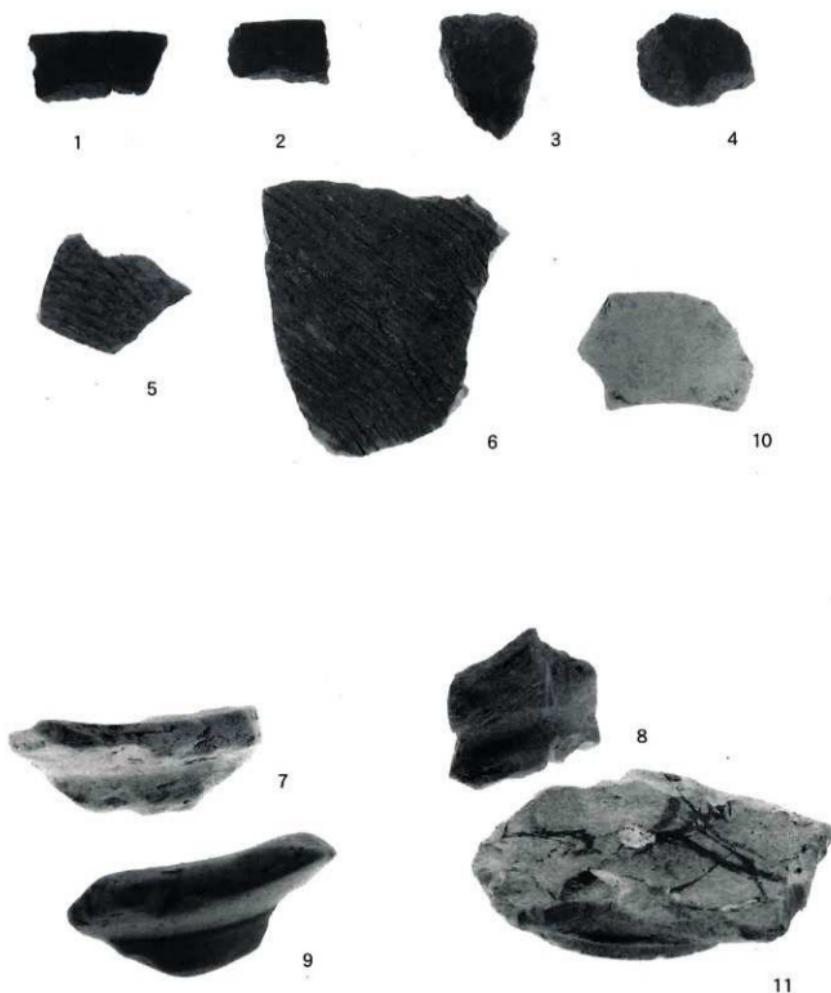


4 トレンチ遺物出土状況



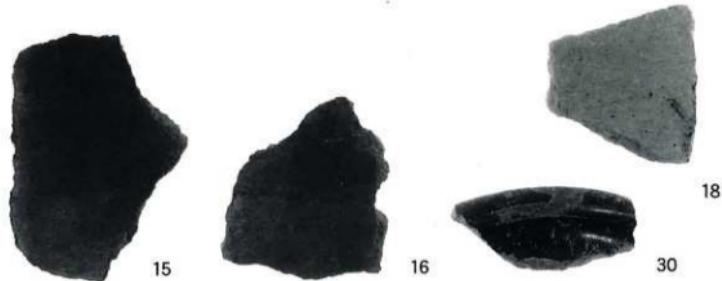
4 トレンチ遺物出土状況

調査状況（4）

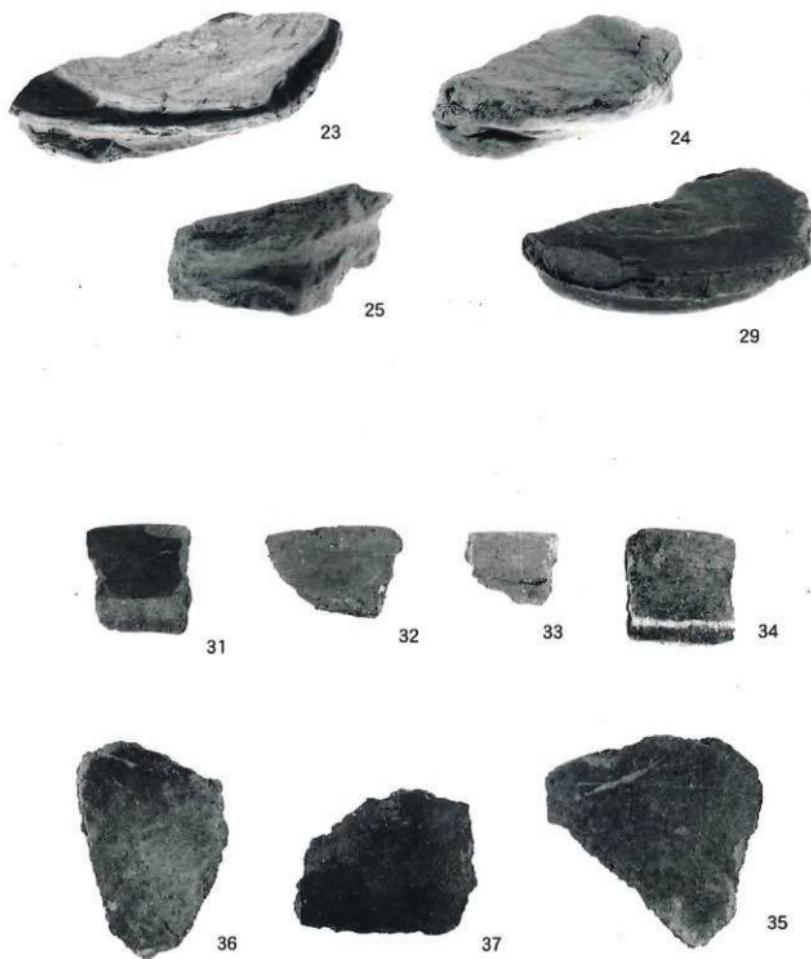


出土遺物（1）

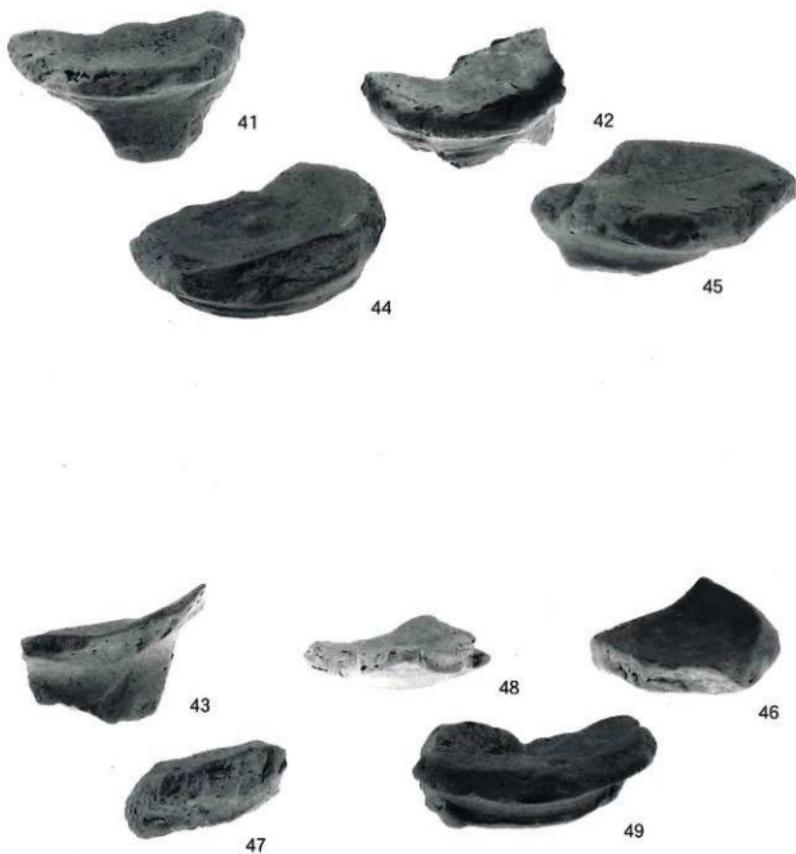
图版 6



出土遗物 (2)



出土遺物（3）



出土遺物 (4)



52



56



52



56

出土遺物（5）

図版10



38



40



39



55



50



53

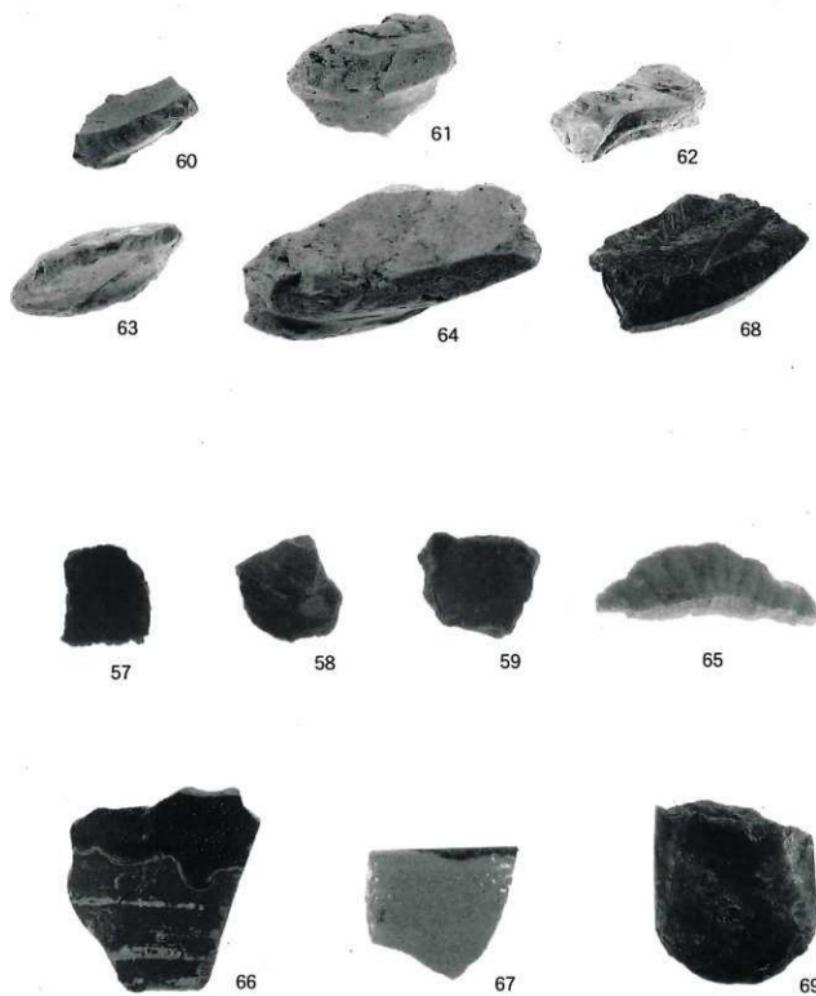


51



54

出土遺物（6）



出土遺物（7）

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（13）

**武部製鉄所跡・奥ノ仁田遺跡・赤尾木城址・太田遺跡**

発行日 2004年3月26日

発 行 西之表市教育委員会

〒891-3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地

TEL (0997) 22-1111

印 刷 (有)種子島新生社印刷

〒891-3101 鹿児島県西之表市西之表16736-1

TEL (0997) 22-0476